20 世紀メディア研究所 ： 第 113 回研究会　2017 年 7 月 29 日

# ［資料］戦後時局雑誌の興亡 1946-57―『政界ジープ』vs.『真相』

（加藤『「飽食した悪魔」の戦後―― 731 部隊・二木秀雄と「政界ジープ」』花伝社、2017 の要約・抜粋）

## 1　「愛国者尾崎」を「赤色スパイ」へとイメージチェンジした時局雑誌 48.10『政界ジープ』

2014 年 11 月、東京での第 8 回ゾルゲ事件研究国際シンポジウムに参加し報告する過程で、ゾルゲ事件から派生する、731 部隊とのつながりを見出した。多磨霊園にあるリヒアルト・ゾルゲの墓と、そのそばに建てられた「ゾルゲとその同志たち」と刻まれた慰霊碑である。1941 年 10 月に検挙されたソ連赤軍諜報員リヒアルト・ゾルゲと元朝日新聞記者・尾崎秀実は、事件の主犯として、戦時中の 1944 年 11 月 7 日に死刑に処された。尾崎秀実は、同じく多磨霊園にある尾崎家の墓に埋葬されたが、ドイツ人だがソ連がその存在そのものを認めていなかった諜報員ゾルゲは、戦後しばらく、その遺骨の所在もわからなかった。

敗戦日本のゾルゲ事件の主人公は、しばらくのあいだはゾルゲではなく、尾崎秀実であった。友人たちによって編まれた尾崎秀実の獄中から家族への手紙『愛情はふる星のごとく』がベストセラーになり、尾崎の家族へのヒューマンな想いと日本の軍部・警察に「国賊」とされても政治的信念を貫き通した勇気が「愛国者」として讃えられた。1945 年から 49 年にかけては、侵略戦争の反省、ＧＨＱによる日本の非軍事化・民主化、日本国憲法制定と極東国際軍事裁判による戦犯追及、それに戦勝国ソ連の社会主義と指導者スターリンの名声の中で、ゾルゲ諜報団の活動を、国際的な反戦・反ファシズムの活動の中で評価する動きが強かった。

流れが変わったのは、占領政策が初期の民主化・労働運動奨励から反共・資本主義再建へと変容するいわゆる「逆コース」のなかで、ゾルゲ事件がソ連共産主義による「赤色スパイ団」の犯行とされてからである。それは、1949 年 2 月の米国陸軍省発表、いわゆるウィロビー報告で、戦前特高警察・裁判資料の市部が公表され、事件が米国風に再構成されて、後に『赤色スパイ団の陰謀』と題して書物になる（東西南北社、1953）。アメリカでは、いわゆる「赤狩り」、マッカーシズムのさなかであった。その流れをつくり、**日本でのゾルゲ事件イメージを大きく変えるきっかけを作ったのは、ウィロビー報告の 4 か月前、『政界ジープ』という当時の大衆的時局雑誌の「特別政治情報、第 2 号」（1948 年 10 月号）に掲載された、「尾崎・ゾルゲ赤色スパイ事件の眞相」という特集**であった。

**この『政界ジープ』の特集記事を、リヒアルト・ゾルゲの東京での愛人だった銀座のバーの女給、石井花子が読み、それが多磨霊園のゾルゲの墓標建立のきっかけとなった。**ゾルゲの遺骨発見の手がかりとなった占領期の右派時局雑誌『政界ジープ』1948 年 10 月号は、それまでのゾルゲ事件報道と、大きく異なっていた。**翌年 2 月のウィロビー報告を先取りした新事実が含まれ、ウィロビー率いるGHQ・G2（参謀第 2 部）やCIC（対敵防諜部隊）から得た情報と推定できる。「赤色スパイ事件」というセンセーショナルな日本語の表現も戦後初めて用いられ、そのまま米陸軍ウィロビー報告に踏襲された。**

## 2　『政界ジープ』の発行者・二木秀雄は 731 部隊結核梅毒班長・企画課長

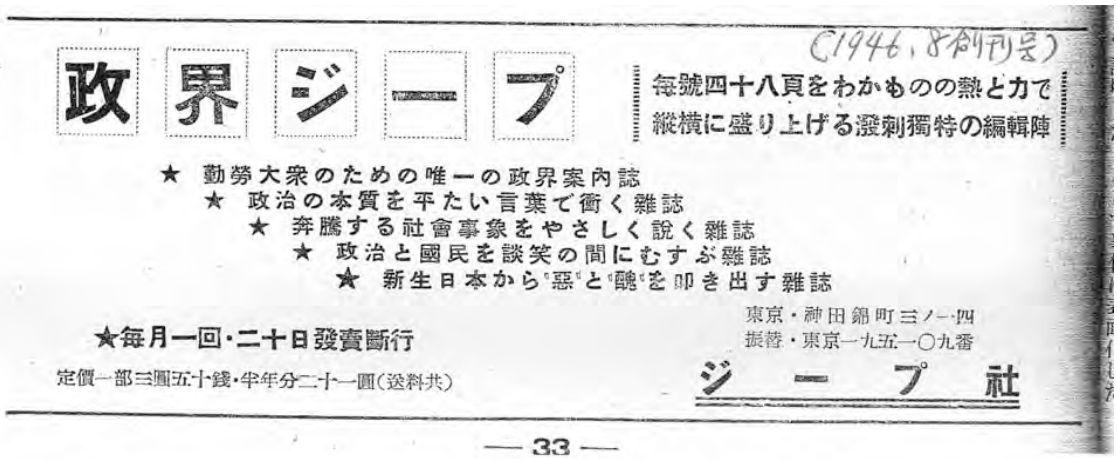
**『政界ジープ』の「尾崎・ゾルゲ赤色スパイ事件の眞相」は、署名記事ではなかったので、掲載雑誌と出版社の方から調べることにした。**するとそれが、**ジープ社という東京の出版社の月刊雑誌で、社長は二木秀雄（ふたぎ・ひでお）という、金沢医科大学（現在の金沢大学医学部）卒の医学博士、戦時中は関東軍 731 部隊結核班長・総務部企画課長（諜報担当）をつとめ梅毒生体実験を行った医師**であることがわかった。**『政界ジープ』の前身は、戦後 1945 年 11 月に金沢で創刊された『輿論』という地方雑誌だった。北陸金沢は、731 部隊長・石井四郎が旧制四高に通ったゆかりの地で、四高後輩・二木秀雄の出身地であるとともに、敗戦直後に 731 部隊幹部が集結して物資・資金を隠匿し、細菌戦隠蔽工作、占領軍対策を練り上げた仮司令部の所在地であった**ことなどがわかってきた。偶然であろうが、**二木秀雄も多磨霊園に葬られ、二木が代表になって建立した 731 部隊関係者の慰霊塔（精魂塔）も多磨霊園にあった。**

敗戦直後に金沢で雑誌『輿論』『日本輿論』を創刊した二木秀雄は、Ｇ２ウィロビーが管理した米軍第一次サンダース、第二次トンプソンの細菌戦調査が済んだ**1946年夏、東京に出てジープ社を興し、月刊誌『政界ジープ』を刊行**し始める。創刊号の表紙は、金沢『日本輿論』のイメージとは大きく変わらない。ただしカラーになる。**46年に創刊される『展望』『世界』『思潮』などいわゆる総合誌・論壇誌の格調はないが、『りべらる』『実話雑誌』『美貌』『猟奇』など通俗的カストリ雑誌の類とも一線を画する。中間的である。**

**強いて言えば、46年3月に「実話読物」と銘打って創刊された雑誌『真相』が、デザイン・編集共に近いもので、その後両誌は10年間継続して自称10万部発行のライバル誌となる。メディア史研究のカテゴリーでいえば、時局雑誌、それも大衆時局雑誌である。『輿論』『日本輿論』の後継誌なのに、なぜか金沢時代には触れず、「進駐軍」のシンボルとして「ジープ」を誌名にする。**「二木」署名の「アクセルを踏む前に――はっかんのことば」は巻末で、『輿論』『日本輿論』の天皇制護持・科学技術立国の「社論」とは、様変わりである。

> 「街を歩いているとジープの波である。ジープはみたところ軽快で、丈夫そうである。どこへでも、山でも、坂でも、ぬかるみでも、何なく突破してゆけそうである。そしてスピードもある。戦車や大砲に比べたらさしみのつまの様でもあるが、なくてはならぬものの様でもある。小粒で手軽だがピリッとしている。日本の様な狭い場所には、うってつけの「足」である。「政界ジープ」は、ジープで表象される雑誌として生まれた。自由、民主という白粉をつけた言論が、昔のデパートの十銭ストアみたいに、色さまざまのよそおいをこらして本屋の店さきにハンランしている。「政界ジープ」もおそまきながら、その中の1つに加えて貰ったわけである。」

創刊号の33頁に、『政界ジープ』自身の広告が載っていて、この方がわかりやすい。


(1946.8創刊号)

政界ジープ

毎號四十八頁をわかものの熱と力で
縱横に盛り上げる溌剌獨特の編輯陣

★ 勤勞大衆のための唯一の政界案内誌
★ 政治の本質を平たい言葉で衝く雑誌
★ 奔騰する社會事象をやさしく說く雑誌
★ 政治と國民を談笑の間にむすぶ雑誌
★ 新生日本から"惡"と"醜"を叩き出す雑誌

★毎月一回・二十日發賣斷行

定價一部三圓五十錢・半年分二十一圓(送料共)

東京・神田錦町三ノ一四
振替・東京一九五一〇九番

ジープ社

— 33 —

**二木秀雄は、東京に進出した『政界ジープ』では、731部隊はもとより、医学博士で医者であることも隠している。創刊号では目立たないが、9月号以降、薬品会社の広告が多くなる**のに気づくのは、731部隊の痕跡を追って読む場合に限られるであろう。ただし、金沢の影を引きずっている特徴がある。それは、印刷所である。「編集発行人　二木秀雄」は東京・神田の出版街に進出したが、**「印刷人　吉田次作」は金沢『輿論』時代と変わらず、「印刷所　吉田印刷所　金沢市中村町7―34」で、用紙調達と印刷は、もともと陸軍御用達の吉田次作に頼っていた可能性が強い。**ジープ社の住所は46年10月号から「東京都大森区田園調布2―691」に変わるが、相変わらず印刷所は金沢吉田商店である。雑誌が軌道に乗ったらしい47年7月号で「印刷人　大橋芳雄　印刷所　共同印刷株式会社」と大手印刷会社に変わる。48年には東京証券印刷が使われる。731部隊戦犯不訴追がほぼ定まる47年9月号からジープ社の住所は「東京都中央区銀座7丁目2番地」に移り、以後銀座の一等地（有楽町駅と新橋駅の間の東海道線沿い）に定着する。

**1946年8月に「勤労大衆のための唯一の政界案内誌」「女の子にもわかる大衆の政治誌」と銘打って創刊された月刊『政界ジープ』は、1946年から56年まで（途中に51年8月から52年3月の休刊をはさみ）10年・100号ほどを刊行し続けた点で、常に『真相』のライバルであった。ただしその内容と主張は通常「反共右派」雑誌とされる。『真相』には復刻版があるが、『政界ジープ』は、全号を所蔵する図書館はない。**国立国会図書館では欠号が多く、メリーランド大学プランゲ文庫もＣＣＤの検閲が終わる1949年までで、これもいくつか欠号がある。法政大学図書館、大宅壮一文庫、日本近代文学舘、江戸東京博物館などで欠号を補い、全国の古書店からの購入で相当数が埋まったが、それでも**1952年から56年3月「政界ジープ恐喝事件」で廃刊するまでの十数号の所在がわかっていない[1]。**

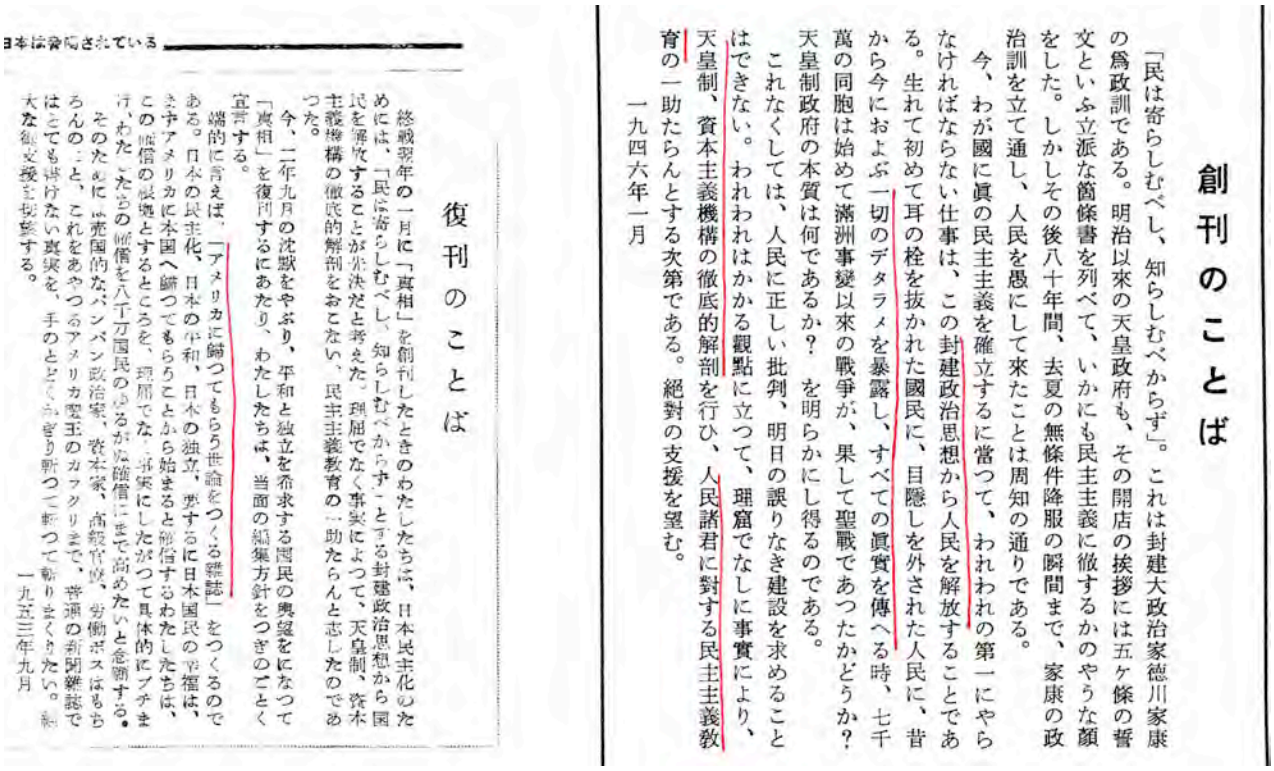
---

[1] **これまで見つかった『政界ジープ』については、私の個人ホームページ「ネチズンカレッジ」に主な論説・記事、表紙カバーを含めて掲載し逐次更新している**ので、本書では総目次はかかげない。以下のＵＲＬを３照のこと。
http://netizen.html.xdomain.jp/yoronjeep.pdf

3　二木秀雄『政界ジープ』のライバル、日本共産党員・佐和慶太郎の『真相』

当時の大衆時局雑誌としては『日本評論』『旋風』『レポート』等もあるが、『政界ジープ』は、左派の『真相』との対比でクローズアップされる。実際『真相』と『政界ジープ』は、表紙・口絵・漫画などの体裁、暴露記事・政財界スキャンダル報道などで、酷似する。1946年から10年間の継続、5-10万部の発行部数で、読者層も重なる。

そこでここでは、ライバル誌『真相』の特徴をひとまず概観し、それとの対比で、二木秀雄の『政界ジープ』を見ておくことにする。佐和慶太郎の『真相』は、1979年から2004年まで岡留安則編集で刊行された情報雑誌『噂の真相』に影響を与えたこともあり、1980年代に全号復刻版が出ている[2]。以下の「創刊のことば」は46年1月だが、発行は3月1日付である。51年1月に休刊に追い込まれるが、53年11月に復刊し57年3月まで刊行される。



創刊のことば

「民は寄らしむべし、知らしむべからず」。これは封建大政治家徳川家康の爲政訓である。明治以來の天皇政府も、その開店の挨拶には五ヶ條の誓文といふ立派な箇條書を列べて、いかにも民主主義に徹するかのやうな顔をした。しかしその後八十年間、去夏の無條件降服の瞬間まで、家康の政治訓を立て通し、人民を愚にして來たことは周知の通りである。

今、わが國に眞の民主主義を確立するに當つて、われわれの第一にやらなければならない仕事は、この封建政治思想から人民を解放することである。生れて初めて耳の栓を抜かれた國民に、目隠しを外された人民に、昔から今におよぶ一切のデタラメを暴露し、すべての眞實を傳へる時、七千萬の同胞は始めて滿洲事變以來の戰爭が、果して聖戰であつたかどうか？天皇制政府の本質は何であるか？　を明らかにし得るのである。

これなくしては、人民に正しい批判、明日の誤りなき建設を求めることはできない。われわれはかかる觀點に立つて、理窟でなしに事實により、天皇制、資本主義機構の徹底的解剖を行ひ、人民諸君に對する民主主義教育の一助たらんとする次第である。絶對の支援を望む。

一九四六年一月

日本は奪隠されている

復刊のことば

終戰翌年の一月に「真相」を創刊したときのわたしたちは、日本民主化のためには、「民は寄らしむべし、知らしむべからず」とする封建政治思想から国民を解放することが先決だと考えた。理屈でなく事実によつて、天皇制、資本主義機構の徹底的解剖をおこない、民主主義教育の一助たらんと志したのであつた。

今、二年九月の沈默をやぶり、平和と独立を希求する国民の輿望をになつて「真相」を復刊するにあたり、わたしたちは、当面の編集方針をつぎのごとく宣言する。

端的に言えば、「アメリカに帰つてもらう世論をつくる雑誌」をつくるのである。日本の民主化、日本の平和、日本の独立、要するに日本国民の幸福は、まずアメリカに本国へ帰つてもらうことから始まると確信するわたしたちは、この確信の限界とするところを、理屈でなく事実にしたがつて具体的にブチまけ、わたしたちの確信を八千万国民のゆるがぬ確信にまで高めたいと念願する。

そのためには売国的なパンパン政治家、資本家、高級官僚、労働ボスはもちろんのこと、これをあやつるアメリカ聖王のカラクリまで、普通の新聞雑誌ではとても書けない真実を、手のとどくかぎり斬つて斬つて斬りまくりたい。新大な御支援を祈願する。

一九五三年九月

月刊『真相』は、1946年3月に「実話読物」を謳い文句に創刊し、57年3月（108号）まで存続した。「バクロ雑誌」「民衆の雑誌」「常に真実のみを語る」と自己規定し、天皇制批判、旧軍人・保守政治家の旧悪暴露、汚職・女性スキャンダル、戦時中の軍隊の横暴・腐敗、女性の社会進出の裏側などを、記事・寄稿・手記・読物、写真・漫画・口絵などを駆使して報じた。シベリア抑留などソ連については甘い記事が多かったが、共産党や社会党の内実の告発報道も多く、中国内戦や朝鮮戦争についても最新情報をセンセーショナルに報じた。発行元の人民社社長・佐和慶太郎は日本共産党員として知られ、当初は中西功らの「人民叢書」を刊行、権力と闘う左派ジャーナリズムとして、後の『噂の真相』に大きな影響を与えた。総合雑誌『世界』『潮流』などとは異なる読者層と大衆的影響力から、今日では占領期の言論資料として全号復刻され、容易に読むことができる。

『真相』は、CCD（民事検閲局）の検閲を最も厳しく受けた雑誌として知られる。1947 年 10 月にＣＣＤは原則事後検閲に移行したが、その際要注意雑誌として『世界』や『中央公論』『改造』と共に事前検閲が残された 28 誌の 1 つであった。プランゲ文庫データベースによる私の調査によると、46 年 3 月創刊から 49 年末のCCD検閲廃止まで、表紙・目次・広告・タイトルを含む記事 1680 件中 242 件、約 15 パーセントが「公表禁止 Suppress」「一部削除 Delete」等の検閲処分を受けた。「真相裁判」として著名な「天皇箒事件」は不敬罪の廃止で免訴となったが、80 人以上から名誉毀損で訴えられ、佐和は『真相』を編集した 8 年間のうち 1 年半を獄中で過ごした[3]。

『真相』は、1950 年の日本共産党分裂による社員内紛により 51 年 1 月（56 号）に一時休刊し、講和・独立後の 53 年

---

[2] 雑誌『真相』復刻版、三一書房、1980―81 年。『真相』については、佐和慶太郎・松浦総三「『真相』の周辺」『現代の眼』1977.3,「佐和慶太郎氏に聞く--一戦後革命と人民社、1―5」法政大学『大原社会問題研究所雑誌』378―383 号、1990 年、佐和慶太郎『左翼労働運動の反省のために』労働者新聞社、1991 年、なども参照。

[3] 『真相』1947 年 9 月号が、昭和天皇が巡幸で立ち寄る宿舎や道路が綺麗に整備されるのを皮肉り、「天皇は箒である」という記事と合成写真を掲げて、保守勢力が「不敬罪」を適用すべきと告発した事件。

11 月（57 号）から復刊して「平和、独立、民主主義の旗じるし」「アメリカに帰ってもらう世論をつくる雑誌」と謳う。復刊直後から「真相鋏厄史、占領下の言論とはこんなもの」という自誌の検閲体験の記録を 13 回にわたって連載し、今日では検閲研究の貴重な素材となっている。検閲された事例は、読売争議、米兵描写、シベリア抑留、天皇制、蒋介石報道などである[4]。GS（民政局）ケーディス大佐の愛人鳥尾鶴代、G2ウィロビーの愛人と言われた荒木光子の写真を「現代日本名花列伝」として掲げ、暗に「奴隷の言葉」でGHQを批判した。

4 二木秀雄の大衆時局雑誌『政界ジープ』――731 部隊隠蔽・免責交渉期は左派的論調でGHQと政局に迎合

月刊雑誌『真相』が、戦前からの日本共産党員佐和慶太郎の興した人民社の発行で、中西功の「人民叢書」などを刊行して占領軍の民主化の波に乗りつつ、3月号「創刊のことば」では「理屈でなしに事実により、天皇制、資本主義機構の徹底的解剖を行ひ、人民諸君に対する民主主義教育の一助たらんとする」と旗幟を鮮明にしているのに対して、『政界ジープ』のフットワークはもっと軽く、「進駐軍御用達」「永田町業界紙」風である。ＧＨＱの検閲があるから当然ではあるが、1949年頃までは、近過去としての戦争や東京裁判を論じることはあっても、731部隊や細菌戦が扱われることはない。『輿論』と違って、二木秀雄以外の関係者が寄稿することもない。

最盛期の48年9月に「今では政治の民主化の旗手として全国10万読者」とあるが、私の調べたプランゲ文庫の検閲記録では刷部数5万部で、同号の「わが国唯一の大衆政治誌」「断然類誌を圧倒、躍進、特ダネ満載」にはやや誇張がある。49年8月には「ある権威ある調査で、総合雑誌は文藝春秋、婦人雑誌主婦の友、文芸雑誌小説新潮、政治時局雑誌では政界ジープが上半期最も売れた雑誌」と自讃し、50年9月の創刊5周年記念号では「戦後続々現れたいわゆる時局雑誌の多くはすでに影を消したが、今日残っているレポートにしろ真相にせよ旋風にしろ例外なく、その内容は別として、企画の立て方から編集の組み方まで、いちばん早く発足した本誌のスタイルをまねてスタートした」と、このジャンルの老舗であることを誇示した[5]。

二木秀雄は、46 年 8 月創刊の『政界ジープ』では、『日本輿論』でのCCDの検閲に学び、注意深く「検閲要綱」事項を論じること自体を避けた。一時は目次を事前に英訳してCCDに届け、米軍の検閲に全面的に従った。検閲だらけのライバル誌『真相』とは正反対である。そのため『政界ジープ』は、『輿論』発刊の目玉であった原爆や天皇制を大きく取り上げることなく、占領政策の展開と「逆コース」に忠実にあわせて、ほとんどフリーパスで 49 年の検閲終了を迎える。

そのため『政界ジープ』の論調は、創刊時は尾崎行雄・長谷川如是閑ら自由主義者に論説を依頼し、マルクス主義者・社会主義者も登場させ、共産党や社会党の国会議員も寄稿した。極東国際軍事裁判で昭和天皇も 731 部隊関係者も免訴となり、片山・芦田内閣のスキャンダルを暴く頃から、保守・反共色を前面に出すようになる。

1946 年 8 月創刊号では、巻頭の尾崎行雄「新日本建設の基点」で、天皇の在位に関わらない改元による人心一新を提案する。他方でマルクス経済学者井汲卓一に「つだ・さうきち博士に寄せて――天皇制学説の新展開」を書かせて、すでに象徴として憲法草案に入った天皇制存続の根拠薄弱を説き、憲法研究会の鈴木安蔵は、「勝利のために――民主人民戦線の展望」で「日本の眼前の荒廃と圧迫とは、民主革命の促進によるほかは絶対に救われない」と主張する。岩波書店の雑誌『世界』で息子の丸山眞男が論壇にデビューしたばかりのベテラン記者丸山幹治が「政変日録」で「幣原から吉田へ」の政局を解説し、常連寄稿者になる。杉野糸子「婦人代議士診断簿」、社会党・山崎道子と新光クラブ・松谷天光光の「わたしの議会初日誌」で女性議員誕生に注目する。

次の 46 年 9 月号では表紙に「女の子にもわかる大衆の政治誌」「小粒でピリットした政界裏面誌」と謳い、メインは高橋正雄「割れた人民戦線」、長谷川如是閑「『象徴』の諸相」で、高倉テル、小川一平、細迫兼光の国会便り、井上まつ子「婦人代議士の悩み」、10 月号は植原悦二郎「議員生活 25 年」、丸山幹治「原敬は官僚か」、高倉テル「山本宣治の死」という具合で、小坂善太郎、上林山栄吉ら保守政治家の寄稿や社会党内紛の裏話も出てくるが、むしろ左派を積極的に登用する。共産党代議士高倉テルはほとんど毎号連載で 11 月号にも寄稿、志賀義雄「世相随筆」、鈴木茂三郎「無産運動 25 年」と『真相』と競い合う。12 月号には中西功「尾崎さんの想い出」でゾルゲ事件が登場し、末川博「河上肇博士」と濱口雄幸遺児・濱口雄彦「父を語る」と並ぶ。「革命家」尾崎秀実の扱いは、2 年後には「赤色スパイ」となるのであるが。こうした編集方針は、47 年、48 年前半も続く。左右・中間リベラル派、老練・若手政治家に女性を加えて発言の場を与え、国会・官僚・財界の裏話やエピソードを写真や似顔絵・漫画を使って散りばめる。プランゲ文庫で見ても、CCDの検閲による削除や修正はほとんどない。

---

[4] 『真相』の検閲については、原田健司「雑誌『真相』検閲の事例紹介」『インテリジェンス』12 号、2012 年、参照。

[5] 1950 年 9 月に「創刊 5 周年」を名乗るのは、『政界ジープ』が金沢『輿論』『日本輿論』誌の後継であることを示し、『真相』より半年早く創刊したことを誇示するためである。もっとも『真相』にも前身『人民』があった。

こうした初期『政界ジープ』の論調は、第 1 に当時のGHQの占領政策に従い、日本の国内政局の流れに忠実に合わせたものである。プレスコードのGHQ批判はもとより、民主化・非軍事化を実行する日本政府批判もほとんどない。

第 2 に、編集兼発行人はジープ社社長・二木秀雄であるが、二木自身が登場することはほとんどない。一般紙や業界紙の無名の記者がアルバイトなどで寄稿し、その中には言論の自由や政治の民主化を求める左派や共産党に近い記者もいたであろうことは、1948 年 12 月に「旧政界ジープ同人編集」と銘打って『政界アサヒ』(編集発行人　笠原真太郎、青銅社)という、編集方針で二木と別れた左派の新雑誌が出ることで裏書きされる。二木秀雄は、ほぼ 48 年半ばまでは『政界ジープ』の版元ジープ社の経営者に徹し、読者の定着と広告を含む経営の安定を図った。この期の言論活動は、47 年 9 月刊行の『政界ニューフェース――日本を動かす 341 人』にまとめられている。政界の中心人物をピックアップして、その印象、経歴等を広く紹介した政界人名録である。自由党から共産党まで近藤日出造の似顔絵付で面白おかしく寸評している。編者の政治的立場や主張はみられない。

また、ゴシップやスキャンダルを売り物にするので、「本誌の名をかたって金銭を強要するものにご注意」「本誌の記者を名乗る〇〇はすでに退社し本社とは一切関係がありません」といった社告が、特に 48 年以降の巻末に頻出する。ジャーナリストばかりでなく旧特務機関員、いわゆる大陸浪人、陸軍中野学校出身者なども登用していたことは、後の「政界ジープ恐喝事件」で明らかになる。二木秀雄以外の 731 部隊関係者がジープ社に雇われていた事例はいまのところ確認できないが、総務や経理・広告、地方通信員などに入っていた可能性も否定できない。

ジープ社は、1947 年 12 月に『財界ジープ』、48 年 8 月に読物雑誌『ジープ』、49 年 3 月に『とびら』(『医学のとびら』)、49 年 11 月に『経済ジープ』と次々に新雑誌を出し(ほとんど数年で廃刊)、ジャンルと販路を広げ単行本も増えるが、これらが旧 731 部隊隊員の受け皿、失業対策であったかもしれない。

## 5　天皇制と戦争責任を追及する『真相』、政財官ウラ話に徹する『政界ジープ』――バクロ雑誌対ゴシップ雑誌

こうした編集方針と論調を、ライバル誌『真相』と比べると、二木秀雄の出版人としての狙いが、いっそうはっきりする。「実話読物」「バクロ雑誌」と銘打って 46 年 3 月に創刊された『真相』の目玉は、天皇制の批判と旧軍人・政治家の戦争責任の追及だった。禰津正志、田中惣五郎、山崎今朝弥らの歴史家・弁護士らを登場させて、天皇制の神話を「称徳天皇淫蕩伝」「村上天皇不倫伝」などとスキャンダラスに暴き、「松岡駒吉とはどんな男か」「河合厚相の戦犯を暴く」「第 1 級戦犯の姻戚調べ」「石橋湛山の戦犯記録」等々と、戦前天皇制日本を告発し、政治家・運動家の過去を暴く論説・記事を売り物にした。永田町・霞ヶ関のゴシップが多かった。

これに対して『政界ジープ』は、戦争責任は「一億総懺悔」風に日本の再起をはかり、政官財界人の過去を問わずに占領政治の人脈を追う。もうひとつの違いが、『真相』は「蒙古脱出記」「露国皇帝処刑の真相」「李香蘭を中国人にしたのは誰か」「ハリウッドの『赤』騒ぎ」などと、戦前の延長上での世界とアジアの動きを検閲でズタズタにされながらも追いかけようとしたのに対し、初期の『政界ジープ』は、米駐留軍人の寄稿や極東国際軍事裁判のニュース報道以外、海外の動向をほとんど伝えない点にある。

これを 731 部隊の隠蔽・免責の文脈に置き換えると、東京に出た二木秀雄は、石井四郎、増田知貞、太田澄、内藤良一、宮本光一、亀井貫一郎、新妻清一、有末精三らが関わるＧ２管理下の米軍細菌戦調査団、法務局（ＬＳ）、国際検察局（ＩＰＳ）による 731 部隊調査の進展を知りうる立場にいた。特に 47 年の第 3 次フェル、第 4 次ヒル＝ヴィクター調査団には直接尋問される立場にあった。そこではまず、米国及び占領軍に恭順の意を示すことが必要だった。医師・医学の世界に留まらず、出版経営者という別世界で再出発していることは、731 部隊結核班長としての実験データを提供して免責されるさいに有利に働いた。結核菌は米軍の求める細菌戦データとしては傍流で、人体実験も尋問過程で深く追究されることはなかった。

ただし青年将校の一人であっても、言論界で目立つことは禁物だった。『真相』の得意とする戦争犯罪追究では、ジープ社の提携する左翼記者であっても、関東軍 731 部隊に行き着くことがありえた。こうした問題は、CCDの検閲対策上でも、取り上げないことが一番だった。最終編集権は二木が握っていた。初期の『政界ジープ』が政治的旗幟を鮮明にせず、左右を問わず政治家を登場させ一見「中立的」であることは、出版経営を安定させるためばかりでなく、731 部隊と二木秀雄自身の戦犯不訴追を担保するために、必要であった。

さらにいえば、万が一でも 731 部隊がメディアと世論の注目を引いた場合に、すばやく反論しもみ消す防諜・情報戦機能を考えていたのかもしれない。それにはGHQ・G2の言論統制との連携が必要になるが、この点で二木秀雄が、ＣＣＤ東京での検閲担当以外のどのような窓口を持ち、亀井貫一郎、有末精三、服部卓四郎らとつながっていたかは、資料も証言もなくわからない。731 部隊総務部企画課長としての二木秀雄のインテリジェンス能力がG2の反ソ反共活動で使われていた可能性はあるが、この点は闇につつまれている。

1948年1月の帝銀事件では、731部隊をはじめ旧軍で毒物を扱った軍人が広く捜査の対象になった。前年中に人体実験・細菌戦データ提供と引き替えに、極東軍事裁判の免責保証を得た石井四郎等は、警視庁の捜査に協力した。しかし8月にG2ウィロビーの意を受けた服部卓四郎・有末精三の捜査介入で、731部隊ルートの捜査は中止され、画家の平沢貞通が犯人とされた。松本清張『日本の黒い霧』の1編「帝銀事件の謎」には、二木秀雄は出てこない。ただしこれを原作とした1980年1月放映、ＡＮＮテレビドラマ『帝銀事件・大量殺人　獄中39年の死刑囚』には、二木秀雄らしき人物が登場する。新藤兼人脚本、森崎東演出、第17回ギャラクシー月間賞受賞のこのリアリズム・ドラマでは、中谷昇が主役を演じる平沢貞通が冤罪であることを強く示唆しながら、青酸カリの出所を探り聞き込みする刑事たちの捜査を追う。そこで、731部隊関連で毒物情報を握っているとされるのが、小松方正の演じる「政界真相社の男」で、事情を知る者には、二木秀雄がモデルと特定できる。ドラマでは刑事達の聞き込みに応じ、「マルタ」について問う警察がどこまで731部隊を知っているかを探りながら、青酸カリではない遅効性化合物が731部隊で「マルタ」処理用に帝銀事件と同じ飲み方で使われていたと証言する。意味深長な役回りである。

ここでの「政界真相社」は、言い得て妙である。帝銀事件時の二木秀雄『政界ジープ』は、GHQ、特にG2の反ソ反共政策に迎合しながらも、731部隊の人体実験・細菌戦がメディアに現れることのないよう、情報収集の網を張っていた。特に危険なのは、大衆時局雑誌界のライバル、日本共産党員佐和慶太郎が発行する雑誌『真相』だった。左派バクロ雑誌『真相』第20号（1948年8月）は、表紙に「見よ！　帝銀毒殺魔の正体」というセンセーショナルな見出しを掲げた。だが本文は、「『真相』に帝銀事件捜査本部があったなら――和製シャーロック・ホームズの一推理」と題する、警察捜査の無能を揶揄する内容であった。「当局でも、もとの軍関係、とくに特殊部隊の医薬関係方面に見当をつけて捜査していたが、この捜査をどうしたわけか十日かぎりで打ち切り、松井博士の名刺の行く先、もう一ぺんあたってみるらしいが、これが外れたら、いよいよ事件は迷宮入りとみているようだ」として、「毒薬の正体は？」「なぜ20万円だけ盗んだのか？」「犯人は麻酔中毒者か？」と「麻酔薬のヤミ取引」に真犯人を見出す観測記事で、731部隊には全く触れていなかった。二木秀雄はおそらく、これを読んで安心した。G2が731部隊の秘密を守ってくれると確信できた。ライバル誌の観測記事を無視し、『政界ジープ』は、時の芦田内閣を揺るがす昭和電工事件の方を大々的に取り上げ、帝銀事件に触れることはなかった。

6　二木秀雄『政界ジープ』の逆コース、反共雑誌化

731 部隊の戦犯訴追の可能性がほぼ消え、帝銀事件の捜査もGHQ・G2の介入で平沢貞通逮捕に舵を切られた1948 年秋、二木秀雄の時局雑誌『政界ジープ』は、それまでの左右に広く誌面を開いた「是々非々＝中立」的論調から、反共保守、反ソ親米へと、旗幟を鮮明にする。リヒアルト・ゾルゲの遺骨発見のきっかけをつくった『政界ジープ』48 年 10 月号（特別政治情報第 2 号）は、その転換点に位置した。『政界ジープ』48 年 10 月号のゾルゲ事件特集報道は、二木秀雄が 731 部隊免責過程でGHQ・G2と結びつき、そこからリークされた資料ないし情報にもとづいて書かれた、反ソ反共スクープ記事と考えられる。米軍収集ゾルゲ事件資料は、G2ウィロビーのもとで管理されていた。731部隊情報の「絶対的管轄」と同じである。つまり、731 部隊の隠蔽・免責とゾルゲ事件のウィロビー報告による「赤色スパイ」事件公表は、同じコインの裏表の関係にあった。対ソ諜報のため、石井四郎は隠され、尾崎秀実は「赤色スパイ」として断罪される。元 731 部隊企画課長・対ソ諜報担当だった二木秀雄が、どこまでG2に入り込んだかは不明であるが、戦犯不訴追以上のなんらかの代償をえて、ゾルゲ事件「赤色スパイ」報道の先駆けとなった可能性は高い。G2ウィロビーにとっては、公称十万部の反共保守の日本語時局雑誌を、「逆コース」の情報戦に用いるひとつのルートを得た事になる。

『政界ジープ』誌上でのその兆候は、1948年に入って、いくつか現れていた。731部隊免責が不確かな47年までは、ジープ社社長・二木秀雄の大きな署名記事はなかった。短い「編集後記」を書いていただけの二木秀雄が、48年に入ると、誌面に頻繁に現れる。48年2月号で、「近づく総選挙の分野　有力第1線新聞記者がものする政界裏面のバクロ座談会」があり、「有力各社の第1線記者」は匿名ＡＢＣＤだが、司会が「二木」で、論点整理を行っている。48年4月第19号では、「二木秀雄」名で主役に躍り出る。「本社主幹　二木秀雄」は、「肉体の門」の作家・田村泰次郎との対談・巻頭「政治なき国会の門」で、「政治の貧困が闇の女を生む」「女代議士と芸者とパンパンガール」「弱い女の共感者」「国会の門に政治なく肉体の門に政治あり」と新時代の新たな道徳を提唱する。同時にこの号から「編集後記」は編集長の中西清に委ねられる。

二木秀雄は、『政界ジープ』48年6月第21号の巻頭で、「駐日中国代表団　謝南光」との対談「米ソ戦は起こらない」に登場する。二木の外交デビューである。謝南光は、台湾出身で、東京高等師範で学び抗日運動に加わった。中国共産党と内戦中の中国国民党政府の対日代表高官で、731部隊出身の二木は、中国国民党に近づくことで、米国の反共世界戦略に従うつもりだったのかもしれない。二木の対談相手の謝南光は、内戦で中国共産党が勝利し国民党政

府が台湾に移ると、故郷の台湾に戻らず、国民党から離れ毛沢東の新中国で華僑代表の中国人民代表会議議員をつとめた。二木の中国接近は失敗に終わった。

**同じ号では、「怪文書　共産党黒沢尻会議」という、日本共産党が岩手県黒沢尻町で秘密会議を開き、北海道経由でソ連との秘密の連絡方法を決定し宮本顕治と土方与志をソ連に派遣した、という怪文書を発表した。これは米軍G2かその傘下の反共特務機関から流れたものと思われる**が、共産党『アカハタ』は「笑止千万なデマ」と否定した。**片山内閣時代の政界には、共産党に限らず各種の怪文書・謀略情報が流れていた。『政界ジープ』は、その拡声器になって、販売部数を伸ばす。9月号巻頭が元内閣書記官長、保守政界の怪物・楢橋渡と二木秀雄の対談で、同時に「日本共産党を動かすのは誰か　『赤い軍隊』の指揮官」という共産党の内部情報を特集する。保守系反共時局雑誌の基本性格が整った。**

## 7　ジープ社出版の多角化、『経済ジープ』刊行で政官財界人脈づくり

**二木秀雄のジープ社は、月刊『政界ジープ』をメインにしながらも、48年頃から他の雑誌に手を広げ、単行本を含む綜合出版社への変貌を図る。**ゾルゲ事件を特集した48年10月号は「特別政治情報第2号」と謳っていたが、この月は「どうなる総選挙と次の政権　朝日・毎日・読売政治部長に聞く」「社会党黒田騒動の内幕」「中共党工作の正体　狙いは細菌戦術」などを掲載する通常号も出ている。**別冊形式の増号**である。**通常号との大きな違いは、表紙に佐田七郎画の女性の裸体を描いて、当時の「カストリ雑誌」のエロ・グロ・ナンセンス路線に追従していることである。近藤日出造らの政治家似顔絵を表紙にした通常号にも、女性議員記事や女性スキャンダルが多かったが、「特別政治情報」はそれに輪をかけて、政治の裏面の男女関係を描く。この「特別政治情報」型編集手法は、50年4月の『別冊　政界ジープ』創刊に受け継がれていく。**

『政界ジープ』はまた、**出版事業の延長上で、街頭政治にも乗り出す**。48年7月10日、『政界ジープ』創刊2周年記念事業として、日比谷野外音楽堂を借り切り「政界浄化各党代表大討論会」を開催する。昭和電工事件、炭鉱国管事件などを背景に、衆議院不当財産取引調査委員会委員長・武藤運十郎（社会党）のほか、民自党・石田博英、民主党・荊木一久、社革党・田中健吉、農民党・中野四郎、国協党・石田一松、共産党・徳田球一の7党代議士が演説、それを「本社社長　二木秀雄」の挨拶でまとめるかたちだった。「政界浄化の一大国民運動」と銘打ち、「万余の聴衆」を前に演説する二木秀雄の写真も出ている。同時に、石田博英から徳田球一まで、政界の要人にジープ社社長の自分を売り込んでいる。

そればかりか、**二木秀雄のジープ社は、48年8月から、「大衆読物雑誌」「娯楽雑誌」と銘打って、月刊『じーぷ』の刊行を始める。国立国会図書館には48年8月創刊号から12月第5号までしか残っておらず、49年以降も出たかどうかは不明**であるが、私の古書店から得た48年12月第5号は「戦後8大犯罪特集　戦慄・情痴の世界を衝く」となっている。巻頭は、永田久正「恋の平澤、色の小平」である。帝銀事件の平澤貞通被告の女性関係を敗戦直後の小平義雄の連続強姦殺人事件と同列に扱い、旧軍731部隊と帝銀事件の真犯人との関係を切り離して、猟奇殺人に仕立て上げている。

**ジープ社は、カストリ娯楽雑誌の読者層に手を広げると同時に、47年12月から、月刊『財界ジープ』を刊行、いつまで続いたかは不明であるが（国会図書館蔵書は48年4月号まで）、49年12月からは後継の『経済ジープ』を30号出している（国会図書館蔵書は51年3月第30号まで）。二木秀雄が政界から財界へと人脈を広げ、同時に広告収入による経営の安定を図ったものと考えられる[6]。**

『経済ジープ』は月2回刊で、創刊号の49年11月5日号の目玉は、一万田尚登・日銀総裁と二木秀雄の対談だった。私の持つ50年5月後期第12号は「特集　公団斬奸録　国民の膏血を搾り取る暴戻15公団の摘発状」、50年9月前期第19号は「特集　脱税手口48手　地方税難産記」であった。**大企業・銀行保険・商社・医薬企業の広告が多く、中央・地方の官庁・企業スキャンダルをセンセーショナルに暴く。二木秀雄は『経済ジープ』にエッセイ「素粒子堂雑記」を連載しているが、どうやらこの『財界ジープ』『経済ジープ』の手法が50年代の『政界ジープ』に受け継がれ、56年「政界ジープ恐喝事件」と記者たちの闇金融・総会屋ビジネス参入につながる**ようだ。

## 8　造反社員の『政界アサヒ』、『医学のとびら』で 731 医学者再結集

こうした 1948 年の『政界ジープ』の反共保守雑誌化、ジープ社出版事業の多角化に対しては、社員や提携記者達の反発もあったらしい。『政界ジープ』48 年 8 月号「編集後記」は「いまでは政治の民主化の旗手として本誌

---

[6]　当時の特許庁『工業所有権公報』によると、二木は『財界ジープ』のほかに、『女性ジープ』『よみものジープ』『世界ジープ』（以上、3 月号）、『世界ロマンス』（7 月号）を「第 66 類・雑誌」名として商標登録している。

の名は**全国十万の読者**から親しまれている」と書いたが、この頃のプランゲ文庫検閲記録では、**米軍CCDには5万部印刷**と正直に届け出ている。その数か月後、**「旧政界ジープ同人編集」の名で、造反社員たちの『政界アサヒ』48年12月創刊号が刊行**される。『政界アサヒ』「発刊の言葉」は、ジープ社社長二木秀雄の731部隊での前歴と戦犯不訴追・免責を知ってか知らずか、ジープ社の内紛を、以下のように暴く。おそらく**社会党や共産党からもニュースを得てきた良心的記者達の反乱で、二木に追放された**のだろう。

> 私達編集同人は2年前、大衆のための政治誌をめざして『政界ジープ』を発刊した。…しかし**雑誌の基礎漸く固まらんとするころ、その編集方針はガラリと一変せられ、大衆に迎合する安易な政治への追随主義と変ってしまった。民主主義を説く社内が最も非民主的なものになってしまった**ことも体験した。そして発刊の趣旨も主張も完全に失われてしまった。私達が政界ジープ社と絶縁してしまったのはその為からであった。苦節半歳、私達はここに『政界アサヒ』を創刊する。新しい民主主義と正しい政治のために…。

**編集兼発行人・笠原真太郎とあり、版元は青銅社である。ただし体裁は、『政界ジープ』表紙の近藤日出造の政治家似顔絵が、『政界アサヒ』では清水崑の描く片山哲に代わったくらいで、グラビア・構成・コラム等も『政界ジープ』そっくりである。内容も特集「昭電旋風吹きまくる＝吹っ飛んだ芦田内閣」「戦線をかくらんする人々＝民同攻勢何処へ？」で、『政界ジープ』の反共色をやや薄めた程度である。左派ライバル誌『真相』ほどの急進性も、天皇制や資本主義の批判もない。版元の青銅社は『政界アサヒ』発刊のためにできた出版社らしく、その後『真相』を休刊した佐和慶太郎が加わり、無着成恭『山びこ学校』を1951年のベストセラーにした。**平塚らいてふ・櫛田ふき監修『われら母ならば　平和を祈る母たちの手記』（1951年）、ルイ・アラゴン『共産主義的人間』（53年）などの単行本を出す。雑誌『政界アサヒ』は、国会図書館に49年6月第4号まであるというが、私が入手できたのは、48年12月創刊号のみである。どうやら二木秀雄には対抗できず、半年で廃刊に追い込まれたようである。

**『政界ジープ』の方は、49年4月号巻末に「最近『旧政界ジープ同人編集』と名乗る本誌類似の雑誌が発行されておりますが、右は本社とはまったく関係がありません」と小さな「社告」が出ているだけである。二木秀雄にとっては、731部隊の旧悪が暴かれたわけでもなく、軽くあしらうことで済むエピソードであった。**

**二木秀雄の出版ビジネスにとってより重要なのは、ジープ社発行の医師・医学生向け雑誌、厚生省医務局編『医学のとびら』（49年発刊時は『とびら』、51年まで）刊行で、旧731部隊関係者を自社の雑誌を通じて再結集し復権すること、及び単行本市場にも手を広げ1948年1点・49年2点から50年に突然400冊以上の出版に踏み切ることであった。**石井四郎をはじめとした731部隊の戦犯不訴追・免責は、日本で早くから冷戦を推進したＧ２ウィロビーの庇護・管理下で進行し、国内冷戦の定着の過程で復権・復活に向かった。二木秀雄の『政界ジープ』刊行・普及、ジープ社の経営安定・多角化の歩みは、その一つの事例であり、かつ、復権の一つの指標であった。

## 9　朝鮮戦争前夜に原子力礼賛を再開した二木秀雄『政界ジープ』と『真相』の原爆被害報道

**二木秀雄の『政界ジープ』は、占領政策の「逆コース」に乗って左派の『真相』に対抗する右派の時局雑誌として部数を伸ばし影響力を広げる。**1949年以降の誌面に踊るのは、従来からの政財界スキャンダルに加えて、「別冊付録　中国共産党の全貌」「赤い電波に踊る岡田嘉子」（49年3月）、「徳田球一君への公開状」「鈴なりのアカハタ列車、文化人の集団入党」（同4月）、「十月革命説成るか――労働攻勢と共産党の戦術を衝く」「引き揚げ者討論　裸のソ連」（49年10月）、「ハバロフスク将官特別収容所」（49年11月）、「ソ連を支配する12人の男」（50年2月）、「徳田球一を裸にする」「徳田球一予審訊問調書」「一刀両断された赤い学生細胞」（50年7月）等**反ソ反共記事を連発する。実際に部数が増えたのか、49年8月創刊4周年号の巻末で「ある権威ある調査で、総合雑誌は文藝春秋、婦人雑誌主婦の友、文芸雑誌小説新潮、政治時局雑誌では政界ジープが上半期最も売れた雑誌」と誇った。**

49年10月にＧＨＱの検閲が終了し、ＣＣＤ（民間検閲局）は廃止される。原爆被害や第2次世界大戦での国際関係を論じることも可能になった。しかし占領は継続しているから、大新聞や大手メディアはＣＣＤ時代の社内検閲・自主規制の延長上で、米国批判・旧軍礼賛などは注意深く避けた。

**『政界ジープ』も、「中立＝是々非々主義」を掲げながら「逆コース」に迎合し、戦争秘話・戦記読物や第3次世界大戦切迫から朝鮮戦争報道を増やしていった。**「南海の幽鬼：ニューギニアの悲劇――戦友の人肉を喰った」（49年8月）、「天皇と幕僚」（同10月）、「戦争か平和か、米ソ戦を解剖する」（50年4月別冊）、**「極東コミンフォルムの地下組織」**「50年テーゼを生んだ革命指令」「共産党非合法化の前夜を探る」、「スターリン・吉田茂 架空対談」（50年8月）、「戦争、日本はどうなる、われわれの生活はどうなる」「ソ連はいつ攻勢に転ずるか、ソ連は果たして原爆を使うか」**「世紀の運命を決定する水爆の威力、日本国防軍は再建されるか、米国は日本を見捨てない」**「戦禍の朝鮮」（50年9月臨時増刊）といった具合である。

『政界ジープ』49年5月号から、社長の二木秀雄は、コラム「素粒子堂雑記」の連載を開始する。名前からして原子力を連想させるが、その第1回で、二木はかつて45年9月に広島に入ったことを告白し、「原子力は人類を滅亡せしめるか、それとも平和的・建設的に用いられ新しい文明の創造者になるか」という、かつて金沢『輿論』創刊時に掲げた2本柱の1つを表に出す。天皇制はすでに護持されたことを前提として、科学技術立国・原子エネルギー利用の主張を再開した。50年4月の「素粒子堂雑記」には、「原爆、水爆――一次々に創造される人類の新しい力を何とか医学の上にも活用させたい」とある。朝鮮戦争直前、50年6月号では「原子爆弾は世紀の脅威であり、世界の戦慄であるが、それは米国の合理主義の産物であった。広島・長崎の受けた惨禍を思うと、次の戦争が人類文明の破滅を意味することは想像に難くない。…合理主義の産物として現れた原爆を破壊のために役立てないこと――これが合理主義の政治への課題でなければならない」と[7]。

こうした『政界ジープ』の編集方針は、左派のライバル雑誌、佐和慶太郎の人民社の発行する『真相』への対抗でもあった。『真相』は「逆コース」の時代にも、49年下山・3鷹・松川事件報道などで左派の主張を貫いた。社会党や共産党の内情報道も『真相』の目玉で、『政界ジープ』と同じく公称10万部のバクロ雑誌と謳っていた。

占領期の『真相』は、他誌に先駆けて、大々的に広島・長崎の放射線被害継続を報じた。CCD検閲終了直後の49年12月号「平和都市を食う人々」で、「平和」には「ゲンバク」とルビを振った。広島平和記念都市建設法公布で、当時の浜井信三市長、楠瀬常猪知事、広島県選出国会議員池田勇人らが、復興事業の予算と利権をめぐって暗躍していると問題提起した。注目すべきは、ルポ記事中の小さなコラムで「広島の原爆のギセイ者は政府発表によると死亡12万ということになっていたが、今年の記念日にやっと『実は24万でした』と浜井市長から訂正があった。内訳は市民18万、勤労奉仕隊その他労働者3万、兵士3万――当時の配給人口24万5千にくらべて全滅状態といえよう」と、CCDでは禁止された人的被害の実相を正面から取り上げた。

以後も、「世紀の戦慄　米ソ水素爆弾競争を探る」（50 年 4 月）、東北大学イールズ闘争での学生たちの「ここはアメリカの大学ではないぞ」「ノーモア・イールズ、ノーモア・ヒロシマ」の声の紹介（50 年 7 月）を掲げ、「子供たちは戦争をどうみるか」では「今度、戦争がおきたらアメリカとソ連だ。そうしたらきっと日本にも原子爆弾がおちる」と解説する（50 年 8 月）。朝鮮戦争が始まると、太田洋子の記録の紹介や世界の原水爆禁止運動報道など、反戦平和・原水爆反対の主張を正面から掲げる。「原爆がもしニューヨークに落ちたら」（50 年 11 月）、「東京に原爆！　あなたはどうする？」（50 年 12 月）の仮想シミュレーションでは「身の毛のよだつ原子病」「東京に『ヒロシマ』を再現」し、広島・長崎原爆の悲惨を読者に伝えようとした。「原子力の平和利用」、特にソ連の原子力発電については肯定的であったが、当時の仁科芳雄・武谷三男らの「原子力時代」礼賛には距離をおき、休刊直前の「日本版『ウラニウム狂躁曲』時代来る」では、原子力研究・原子炉開発が膨大な予算と新たな利権を生むと注意を促した（51 年 1 月）。総じて佐和慶太郎の『真相』は、CCDの検閲を避けて 46―49 年はほとんど原爆に言及しなかったが、検閲から解放されると放射能被害の悲惨・長期化をも詳しく報じ、反戦平和運動にコミットした。ただし『真相』の版元人民社は、多くの日本共産党員を抱えていた。1950 年 1 月のコミンフォルム批判を受けての日本共産党分裂により、人民社社員の政治的内紛がおこり、秋月俊一郎こと松原宏遠ら所感派が国際派の佐和と対立する。51 年 1 月には、人民社の廃業、『真相』の一時休刊に追い込まれる[8]。

---

[7] 公平のために言えば、二木秀雄風の「原子力の平和利用」は、武谷三男・平野義太郎ら当時の民科系左派も主張したもので、二木に固有のものではない。左派のような「ソ連の核開発」への期待がないだけである。二木も「原爆反対」は述べており、栗原貞子「生ましめんかな」は、もともと『中国文化』創刊号（1946 年 3 月）に発表されたが、全国に広めたのは日本基督教青年会同盟編『天よりの大いなる声』（1949 年）への収録で、発行は東京トリビューン社名だが、二木秀雄が発行人で、同書には二木社長への謝辞が入っている。こうした「原爆反対・原発推進」の論理の問題性については、加藤前掲『日本の社会主義』参照。

[8] コミンフォルムの批判による日本共産党の分裂、「占領下平和革命」論から民族解放を掲げた暴力革命路線への転換について、簡単には加藤哲郎「日本共産党とコミンフォルム批判」（『岩波講座　東アジア近現代通史　第 7 巻　アジア諸戦争の時代』岩波書店、2011 年 2 月）、詳しくは下斗米伸夫『日本冷戦史』参照。人民社を捨てた佐和慶太郎は、かつて『政界ジープ』を追われて『政界アサヒ』を出したことのある記者たちのいる青銅社に移って、無着成恭『山びこ学校』を 51 年 3 月に刊行してベストセラーにする。その後サンフランシスコ講和・独立後の 53 年 11 月に佐和は真相社を興し、雑誌『真相』を復刊して（第 57 号）、「平和、独立、民主主義の旗じるし」「アメリカに帰ってもらう世論をつくる雑誌」と謳う。ビキニ被爆、原水爆禁止運動の時局報道の他に、「濃縮ウラン受入れの裏にあるものは――原子力の平和利用という名の陰謀」（55 年 5 月）などで、正力松太郎と中曽根康弘の暗躍報道でも先駆的役割を果たした。

10　ハバロフスク細菌戦裁判報道と50年3月『レポート』、4月『真相』『政界ジープ』の泥仕合

二木秀雄は、日本共産党の分裂によるライバル誌の政治的苦境・経営危機を利用した。『政界ジープ』50年8月号は、『真相』を名指して、真正面から業界スキャンダルとして人民社の分裂を暴く。「暴力のペン振るう人民社の機密室、代々木本部と訣別した独立共産党」が大見出しで、「『真相』追放の真相」「なめられた共産党」「仮面をかぶった左翼商業主義――光クラブも顔負け」「人民社から追い出された労農通信社」「社員もお互い様と稼ぐ」「真相株主人名簿」「人民社翼賛議会」「ワンマンの天下」「天皇行状記、松原宏遠裸像」「『真相』日共の外郭機関」「真相独立共産党」「百鬼夜行の内幕――佐和・松原の泥試合」「恐るべきスパイ政策」「告訴によってフトる『真相』」「『真相』よ何処へ行く」と、センセーショナルに報じる。

だがそれは、実は『真相』50年4月号の長文の特集「内地に生きている細菌部隊　関東軍731部隊を裁く」というバクロ記事に対する、『政界ジープ』の反撃・逆襲だった。

関東軍防疫給水部、石井四郎等731部隊の人体実験・細菌戦を「細菌兵器の準備及び使用」の戦争犯罪として裁くソ連のハバロフスク軍事裁判は、1949年の末、12月25日から30日に公開で行われた。関東軍司令官山田乙三の矯正労働25年をはじめ12人の被告全員に有罪判決が出た。裁判記録は、タス通信やモスクワ放送で報じられたのち、日本語を含め7カ国語の『公判書類』としてモスクワ外国語図書出版所から出版されたが、当初の日本での報道は、簡単なものだった。49年は9月にソ連の核実験成功が報じられ、10月に中華人民共和国が成立して、社会主義ソ連こそが第3次世界大戦を阻止する「平和勢力」の中心だと宣伝されていた。

『朝日新聞』では、50年2月3日に「ソ連大使ア長官に覚書　天皇の裁判要求」「ソ連大使談　細菌戦の責任」「総司令部法務局長談　米、拒否せん」「極東委の見解　覚書は矛盾」で、米ソの対立するシベリア抑留帰還の遅れに対する弁明、天皇の戦争責任問題の蒸し返しが「2つの宣伝目的」とされている。翌2月4日に、ソ連が昭和天皇、石井四郎、北野政次、若松有次郎、笠原幸雄（関東軍参謀長）の5人の戦犯容疑者を指名して国際法廷を要求してきたと報じた。すでに結審した極東国際軍事裁判（東京裁判）キーナン主席検事の「スターリンこそ戦犯」、イギリス・オーストラリアの拒否、「石井氏は行方不明」などと報じられ、5日の米国務省「天皇裁判拒否」声明発表で、ほぼ決着を見た。いずれも1面掲載とはいえ、大きな扱いではなく、もっぱらシベリア抑留をカモフラージュするソ連のプロパガンダ、政治的裁判とみなされた。

そのため大手の新聞や論壇雑誌ではほとんど無視されたが、こうした宣伝戦こそ、大衆時局雑誌の得意とする領域だった。おそらく最も早いのは、「日本の内幕、世界の真相」をキャッチフレーズとする時事通信社『レポート』誌50年3月号の10頁の特集「731部隊の戦慄」で、ハバロフスク裁判の「カワシマ」（川島清）」「カラサワ」（柄澤十三夫）供述も使って、「荒野の文化都市」平房における「血に飽いた蚤と共に」使われた「人間モルモット」「細菌攻防戦」をセンセーショナルに報じた。「果たして『関東軍細菌部隊』は実在したか？」「第731部隊はつたえられるがごとく、3千の罪なき命をうばった『無法部隊』だったか？」と疑問符を付しつつ、「本誌が全国の通信網を動員して」関係者にインタビューを行い、「東京都在住A氏＝本人の希望により名を秘す」や菊池則光被告の実父ら10人ほどの証言・談話を掲載しており、今日振り返ると、貴重な調査報道であった。

次に大きく報じたのが、『真相』50年4月号の13頁の特集で、「捕虜たちは生身のまま凍らされ、メスでノコギリで手足を切断された。細菌を注入されてもだえ苦しむ彼らは、日本細菌部隊の実験材料であったのだ。新聞は『耳新しい』といい、『荒唐』だと白を切る。しかしこれは事実であり、以下は『真相』独自の調査による証拠書類である」とゴチックでセンセーショナルに書かれている。実際タス通信のハバロフスク裁判報道をベースにしながらも、石井四郎への天皇「感状」や『陸軍軍医団雑誌』まで遡って調べ、被告12名に留まらぬ731関係者を、清野謙次・宮川米次ら大御所から吉

村寿人・石川太刀雄ら実行部隊まで実名・現職を出して掲載する。帝銀事件での疑惑も報じて、戦後の軌跡を幅広く追究する。内藤良一の名はなく「柄澤十三夫」を「唐澤富雄」と表記するような誤りもあるが、「天皇裁判はどうなる」というソ連側戦犯訴追要求の背後に被害者である「中国の4億の人民大衆」をおくなど、鋭い独自の分析が出てくる。その731部隊隊員告発の中に、『政界ジープ』の二木秀雄が、写真入りで入った。「満州猿」とは、無論「マルタ」のことである。

現在『政界ジープ』という時局雑誌を経営している元金沢医大細菌学教室の二木秀雄博士などは、第731部隊技師連中のなかでも、変りダネに属している。柔道4段あるいは5段ともいわれる二木博士は、それだからではあるまいが、「陸軍のドラ息子」（乙津元憲兵隊長談）といわれた石井四郎将軍と、バカにウマがあい、昭和13年いらい、第731部隊の新しい研究題目となった「孫呉熱」病原体の検索のため、ずいぶんハデに「満州猿」を殺してきた。満州で実験に供されるのは、ソ連産であると中国産であるとに拘わらず「満州猿」であり、最近のソ連当局の細菌戦犯の発表後、二木博士は、極度に気が滅入っているといわれるのは、やむをえないのである。

この『真相』特集と一緒の50年4月号の『政界ジープ』が、『レポート』をはじめとした当時の報道への反撃であった。まずは「『天皇戦犯』の震源を衝く」で「アメリカ政府は、これまで日本の法律上の戦争責任に関しては軍部首脳と、天皇を区別し、日本民主化のための天皇を、国民統合の象徴としてみる態度を明らかにしていることは周知の通りである。これに対して真正面から天皇戦犯論を決めつけて来たソ連政府の意図は、日本に共産主義を深く広く成長させるための混乱を期待する点にある」と折からのコミンフォルムの日本共産党野坂批判、「日共ダラ幹を一掃して筋金入りの暴力革命への突進」を狙うソ連共産主義の陰謀の一環とする。戦前いわゆるスターリン粛清期のトロツキー、ジノビエフ、カーメネフ、ラデック、トハチャフスキー裁判の例を挙げて、ハバロフスク裁判は「鉄のカーテンの奥深い場所」でのでっち上げの見世物裁判だと糾弾する。

さらに「細菌戦裁判の実相を暗示する　被告唐澤富雄のメモ」なる「赤色裁判の恐怖！　罪人を製造する拷問のカラクリ！」という謀略報道を大きく掲載する。ハバロフスク将官特別収容所で被告たちと一緒だったという「半年ばかり前に日本に帰ってきた」元特務機関員らしい引揚者2人の得た特ダネ情報として、「唐澤富雄[柄澤十三夫]軍医少佐」が薬品事典様の上質の紙の断片に細かく記し帰還者に託した「秘密メモ」なるものを、8頁にわたって延々と掲載する。「しょう人から、ひぎしゃへ。自はく。いがいたい、すいみん不足」とか「この地ごく、つまのゆめ、ロスケ、こうしゅけいのゆめ」などが、ピストルに脅されスパイに囲まれながら精神を狂わされた柄澤の悲鳴で、そんな獄中での尋問記録は「準備されたる自白」で、拷問・脅迫によるでっち上げだという。荒唐無稽だが、いかにも731部隊対ソ・インテリジェンス担当二木秀雄らしい作り話である。ここには無論、石井四郎や二木秀雄の名は出てこない。柄澤十三夫証言が神経症の妄想とされている[9]。

この『政界ジープ』50年4月号特集を踏まえて、731部隊二木秀雄の名を出した雑誌『真相』そのものを「仮面をかぶった左翼商業主義」「日共の外郭機関」と叩いたのが、50年8月号の『真相』スキャンダル特集だった。いわば日本共産党の分裂・社内紛争という批判者佐和慶太郎・人民社のオウンゴールで、二木秀雄の『政界ジープ』及び731部隊の悪行は、命脈を保つことができた。

翌50年9月号は、金沢『輿論』から数えて創刊5周年記念号と謳う。その「素粒子堂雑記」で、二木秀雄は、『政界ジープ』を「総合雑誌でも娯楽雑誌でもない」「第3の性格」の時局雑誌とし、「戦後続々現れたいわゆる時局雑誌の多くはすでに影を消したが、今日残っている『レポート』にしろ『真相』にせよ『旋風』にしろ例外なく、その内容は別として、企画の立て方から編集の組み方まで、いちばん早く発足した本誌のスタイルをまねてスタートしたことは、同業間はもちろん、読者各位のよく知らるるところである」と、老舗であることを自賛した。ただし、『政界ジープ』は『真相』とは別の「やむをえない経済的事情」で、1951年8月から52年3月に一時休刊する。

## 11　厚生省医務局『医学のとびら』による二木秀雄の医学・医療業界復帰、日本ブラッドバンク創設

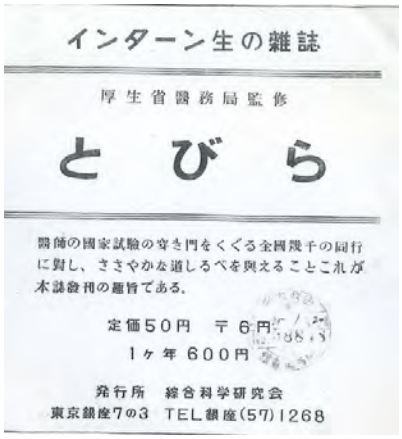
左翼バクロ雑誌『真相』50年4月号が、ハバロフスク裁判を機にライバル誌『政界ジープ』発行人二木秀雄の731部隊・人体実験歴を暴くことができたのは、その1年ほど前から、二木秀雄が「本誌主幹、医師・医学博士」として積極的に発

---

[9] 以上の1950年3月『レポート』、4月『真相』『政界ジープ』のハバロフスク裁判報道は、731部隊細菌戦発覚時の重要資料であるにもかかわらず、最も詳しい参考文献目録である「731部隊・細菌戦 デジタルライブラリー」には出てこない（http://www16.atpages.jp/chisei/731/contents04.html）。やや後の永松淺造「細菌戦の全貌」（『日本週報』1959年3月1日号）も同様である。ただし、家永教科書裁判における歴史学者江口圭一の意見書では、『真相』がとりあげられていた。ソ連崩壊後、近藤昭二とＮＨＫ取材班によって、ハバロフスク裁判の供述記録等全貌が「現代史スクープドキュメント　731細菌戦部隊」（1992年）で明らかにされた。

言するようになっていたからである。戦犯不訴追・免責に安心しての二木秀雄の医学・医療界への復帰が、その経歴や人脈を注目させることになった。

『政界ジープ』1949年6月号に、『とびら』(2巻5号から『医学のとびら』)という厚生省医務局監修「インターン生の雑誌」の刊行が広告に出る。「医師の国家試験の狭き門をくぐる全国幾千の同行に対し、ささやかな道しるべを与えること、これが本誌発刊の趣旨である」という。発行所は綜合科学研究会、但し住所が東京銀座7―3、電話番号57―1268まで、ジープ社と同じである。もっとも、『政界ジープ』奥付は、この号から「東京トリビューン社発行、発行人狭間研一」となっている。「東京トリビューン社」も銀座の住所が同じである。二木秀雄の経営多角化が、いよいよ医事薬事業界に広がった。『とびら』『医学のとびら』は、現在国会図書館に、欠号が多いが残されている。国会図書館には創刊号がなく、第1巻第3号が1949年6月号である。49年4月に創刊されたのかもしれない。47年学校教育法にもとづく新制大学の発足が49年4月で、7月には医療法、医師法、歯科医師法、薬剤師法など、PHW(公衆衛生福祉局)サムス准将の構想にもとづき改革された医療制度が整い、現在まで継承される。


インターン生の雑誌

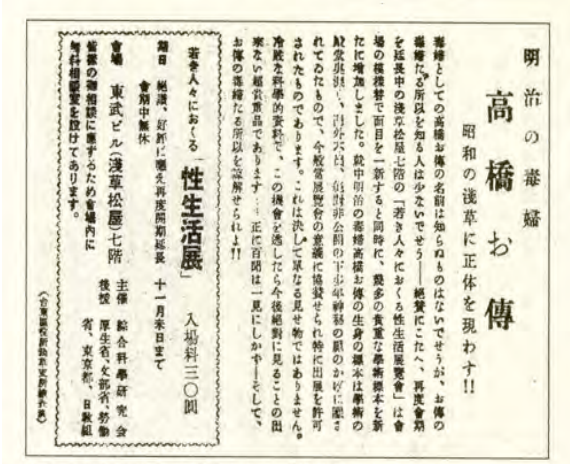
厚生省医務局監修

とびら

医師の国家試験の狭き門をくぐる全国幾千の同行に対し、ささやかな道しるべを與えることこれが本誌發刊の趣旨である。

定価50円　〒6円
1ヶ年600円

発行所　綜合科学研究会
東京銀座7の3　TEL銀座(57)1268


明治の毒婦
高橋お傳
昭和の浅草に正体を現わす!!

毒婦としての高橋お傳の名前は知らぬものはないでせうが、お傳の毒婦たる所以を知る人は少ないでせう――絶賛にこたへ、再度會期を延長中の浅草松屋七階の「若き人々におくる性生活展覧會」は會場の模様替で面目を一新すると同時に、幾多の貴重な學術標本を新たに増加しました。故中明治の毒婦高橋お傳の生身の蝋本は學術の殿堂浜田、引外氏は、信濃非公開の平沢平神経の眼のかが所に展示されてゐたもので、今般常設覧會の意義に協賛せられ特に出展を許可されたものであります。これは決して単なる見せ物ではありません。冷厳な科學的資料で、この機會を逃したら今後絶對に見ることの出來ない超貴重品であります……正に百聞は一見にしかず――そして、お傳の毒婦たる所以を諒解せられよ!!

若き人々におくる「性生活展」　入場料三〇圓

期日　絶讃、好評に應え再度開期延長　十一月末日まで
會期中無休
會場　東武ビル(浅草松屋)七階
主催　綜合科學研究會
後援　厚生省、文部省、労働省、東京都、日教組
性愛の御相談に乗ずるため會場内に毎日相談室を設けてあります。

お伝の陰部の標本が公開された「性生活展」の広告

新制医学部・医科大学は、6年制の医学教育の後、1年の実地研修インターンを経て医師国家試験を受ける医師養成制度に統一された。二木秀雄の『とびら』『医学のとびら』は、いわばその国家試験用受験雑誌で、国会図書館蔵書では3巻3号(1951年4月)までの刊行が確認できる。厚生省医務局監修の国家試験受験生向け雑誌であるから、合格率100%をめざして、当時の医師国家試験審議会委員長・児玉桂三も寄稿している。本書の関心からすれば、731部隊関係者の石川太刀雄、緒方富雄、内野仙治らが頻繁に登場し、専門知識を披露している。金沢大医学部の石川太刀雄は、ほぼ毎号登場する常連で、国家試験委員なのかもしれない、もう1人の常連は、二木秀雄である。ジープ社と同じ住所の綜合科学研究会の代表で、連載「ぴあ・めでちな」を書いている。すなわち「編集兼発行人　二木秀雄」が「編集後記」と共に毎号登場する医学雑誌である。どうも、二木秀雄と石川太刀雄の731部隊金沢仮司令部コンビが、厚生省医務局(とPHW)のお墨付きを得て、731部隊医学者の再結集をはかったかに見える。

もうひとつの特徴は、表紙裏から裏表紙まで、医薬品の広告である。すでに出た『政界ジープ』や『財界ジープ』でも医薬品・医事企業の広告が銀行・保険会社と共に多かったが、若い医師と新知識を求める全国の開業医向けに医薬広告をとり、厚生省と医薬・医療機器産業と医学・医療界の癒着の構造の接点に、二木秀雄は医師兼出版ビジネスマンとして潜り込もうとしたようである。二木秀雄の復権の第1歩は、厚生省と医薬業界と医学者・医師を結びつけ、秘かに731医学を復活することであった。

『政界ジープ』1949年8月号の二木秀雄「素粒子堂雑記」は、「私の友人、知人の大部分は医者である。大学の先生もあれば町の開業医もある。役人をしているものもあるが、それも根は医者である」と、『とびら』創刊の仕掛けを、さりげなく告白している。次の9月号に「綜合科学研究会主催の『産児制限展』を見るために大阪に行った」と記し、10月号「素粒子堂雑記」では、次のようにいう。

> 7月から9月にかけて、私の主宰している綜合科学研究会は大阪の阪急百貨店、東京では銀座三越と浅草松屋で「性生活展覧会」を開催した。厚生省、文部省、各大学をはじめ関係当局の絶大な指導と援助のもとに行われたもので、有意義な仕事であることは最初から判っていたが、性問題となると頭から不真面目なもの、紳士淑女の口にすべからざるもの、と考え勝ちな人々も少くないから、その成果には多くの疑問があった。ところが、フタをあけてみると入場者の数も、その態度もこうした危惧を打破り、非常によかった。特に女学生や、若い主婦が真剣に資料を見ている姿が目立った。最近性病予防週間に際して当局が発表した数字によると昭和23年度の性病患者数は47万余に

上り、新しい傾向として一般家庭婦人の新患者がふえていることと、赤ちゃんの先天性梅毒が激増していることが指摘されている。…これをお役所まかせにせず、広く国民的な運動にまで進めなければならないと思う。

731部隊における二木秀雄の医学的役割は、結核菌の培養と治療方法の開発、その応用としての結核菌による細菌戦の可能性の探究だった。だが、医学者としての二木秀雄は、東大・京大など帝国大学医学部細菌学教室の俊英が揃った731部隊では、必ずしも秀でたものではなかった。しかし**二木秀雄にも、医学的に活躍できるひとつの領域があった。博士論文で扱った梅毒など性病の世界である。731部隊で梅毒研究も進めており、何よりも、満州で売娼や従軍慰安婦に接し、忌まわしい梅毒人体実験までして、性病対策に取り組んできた。二木が医学・医療界に復帰し入り込むには、性病対策・産児制限・受胎調節の世界しかなかった。それが、1949年の綜合科学研究会であり、性生活博覧会だった。主催は綜合科学研究会であるが、住所は『政界ジープ』のこの号の発行元東京トリビューン社と同じで、二木の銀座ジープ社ビルである。「資料提供」は東大、京大、阪大、金沢大、慈恵大、日医大、国立公衆衛生院、国立教育研究所、とある。これに「後援」として、厚生省、文部省、労働省、東京都に加えて、結成3年目の日教組まで入っている。学術的で官公庁に教師たちの労働組合まで後援なら、まだ旧い道徳観念の残る親も、安心して「若き人々」に性教育として見せることができる、という魂胆だろう。**

ところがこの**展覧会の目玉は、「明治の毒婦高橋お傳　昭和の浅草に正体を現わす」というキワモノ展示だった。**ルポルタージュ作家・大橋義輝は、1876（明治9）年、東京でおきた強盗殺人事件の犯人として死刑となった高橋お伝の猟奇的事件と、その死刑に処され解剖された遺体の行方を追って、二木秀雄の「性生活展」に行き着いた。大橋は、この時の浅草松屋デパートのチラシ広告を発掘し、著書『毒婦伝説』に掲載している。そこには「明治の毒婦高橋お伝の生身の標本は、学術の殿堂深く、門外不出、絶対非公開の下、多年神秘のかげに隠されていたもので、今般当展覧会の意義に協賛せられ特に出品を許可されたものであります。これは決して単なる見世物ではありません。冷徹な科学的資料で、この機会を逃したら今後絶対に見ることのできない超貴重品であります」とある。その「科学的資料」とは、高橋お伝の解剖された女性器のアルコール漬け標本で、これが宣伝の目玉であった[10]。

実際の展覧会の模様は、ハバロフスク裁判柄澤十三夫被告についての謀略報道が掲載された『政界ジープ』50年4月号に、山下紀一郎の絵と文による「わかき人におくるルポルタージュ『性生活展』探訪」で描かれている。このルポ記事は、カストリ雑誌の「夫婦もの、性典もの」流行に乗った興味本位のもので、男女生殖器の図解、性病解説、避妊具展示販売などの部屋の模様が漫画絵入りで並ぶ。「参観者の波」に「若い人」はあまり登場せず、どうやら『医学のとびら』がらみで雇ったアルバイトの医学生が展示説明や性生活相談に乗っていた。

**この性生活展覧会の開催中、49年10月『別冊政界ジープ』は、全号「受胎調節」の特集で、ジープ社のビジネス宣伝を兼ねていた。**巻頭は「京大名誉教授」とあるが、実は731部隊の嘱託で初代の金沢大学学長になったばかりの戸田正三が「生活物資と人口」を書いている。公衆衛生院長・古屋芳雄「人口問題と産児制限」、東大教授・田中耕太郎「受胎調節に反対する」のほか、日教組後援の獲得のためか、野坂龍「ソ連で産児制限はどう扱われているか」、加藤シズエ「わが産制運動の回顧」も入っていた｛この頃**グラビアの目玉は「政治家の奥さん」**｝。

## 12　731 部隊隠匿資金・米軍資金？――ジープ社 1950 年単行本 400 冊の謎、社名・編集人・発行人の変遷

**1950 年に日本ブラッドバンク（ミドリ十字の前身）設立に加わり、素粒子堂診療所院長となった二木秀雄の出版活動は、同じ1950年に、奇妙な動きを示す。**それまでも雑誌の種類を増やして多角化し、単行本も数冊は出してきたが、**1950年にジープ社は、突然400冊もの単行本を出す。**

出版ビジネスは、企画・印刷・製本の製作費が先にかかり、書店の店頭で売れて初めて売上金が回収される。当時の出版業の常識からすれば、雑誌だけでも大変なのに、大量の単行本刊行に膨大な運転資金が必要になったはずである。それは、どこから出たのであろうか？　731部隊敗戦時の隠匿資金・資産、米軍に提供した人体実験データの対価25万円の一部が使われているのだろうか。

**国立国会図書館サーチ（NDL）で「ジープ社」の出版物を検索すると、『政界ジープ』『経済ジープ』『医学のとびら』等数種の雑誌のほか、奇妙なことに気づく。単行本が 1946 年 9 冊、47 年 4 冊、48 年 1 冊、49 年 2 冊の後、50 年に突然 409 冊になり、51 年は 30 冊、以後は同名他社で単行本は出版されない。50 年も同名他社かと図書館で調べると、「ジープ社刊・発行人二木秀雄」となっており、事実この年の『政界ジープ』の巻末は、膨大な自社の新刊単行本広告で埋**

---

[10]　大橋義輝『毒婦伝説――高橋お伝とエリート軍医たち』（共栄書房、2013 年）、同『拳銃伝説――昭和史を撃ち抜いた１丁のモーゼルを追って』（共栄書房、2016 年）。

められている。出版内容は雑多で、「ダイジェスト・シリーズ」と銘打ち、古今東西の古典・名作からツルゲーネフ、魯迅、太宰治まで、世界文学を何でもダイジェストにして、気楽に筋を追う安易な解説本が多い。マキアベリ『君主論』、マルサス『人口論』、ペスタロッチ『愛の教育』などはダイジェストだが、柳田国男『日本の昔話』、石川三四郎『古事記神話の新研究』、田村泰次郎『人間夜食』などは、本格的書籍らしい。大宅壮一『日本の遺書』や今日出海『天皇の帽子』なら話題になったはずで、読んだ記憶がある。だが圧倒的にマニュアル本、入門本が多い。政治的・思想的傾向も雑多な中で、強いてこれまでの二木秀雄の軌跡とつながるものを捜すと、単行本になった二木『素粒子堂雑記』のほか、『これがアメリカ』『アメリカ留学ノート』『労働とデモクラシー』などの米国礼賛本、蕭英『私は毛沢東の女秘書でした』、ルイス・ブデンツ『顔のない男たち――アメリカにおける共産主義者の陰謀』など反共本が拾える程度である。翌51年の30冊は、50年企画の延長上で刊行が遅れた同系統のもので、52年以降、いっさい単行本はない。いったい何のために、朝鮮戦争開始・日本ブラッドバンク設立の50年に、ジープ社は単行本を乱発したのだろうか[11]。確かに48年に4581社あった出版社が51年には1881社に激減する出版不況の時期で、レッドパージによるジャーナリスト受難・失業のさなかであるが、これが翌年のジープ社倒産の理由だろうか。

二木秀雄の出版ビジネス経営術も、不可解である。同住所にいくつか別名の子会社を作り、雑誌の編集・発行人もめまぐるしく交代する。左派のライバル誌『真相』社主・佐和慶太郎も、この時期「人民社→青銅社編集部→真相社」と変遷するが、それ以上にわかりにくい。

『政界ジープ』は、1946年8月創刊から49年4月号までは「ジープ社、編集発行人二木秀雄」であった。ところが49年5月から50年3月号までは、「東京トリビューン社」という別会社（といっても同一住所）が、発行元になる。「発行者」はこの間、49年5月から12月まで「狭間研一」、50年1―3月は「東京トリビューン社、二木秀雄」である。ちょうど厚生省医務局『とびら』『医学のとびら』を「ジープ社、二木秀雄」名で出していた時期で、どうやら一般向け『政界ジープ』と医師・医学界向け『医学のとびら』の発行元を、いったん分離したようである。もっとも『別冊・政界ジープ』『経済ジープ』及び単行本は、基本的に「ジープ社・二木秀雄」発行が続く。『政界ジープ』の版元は、朝鮮戦争直前の1950年4月号から51年7月号後の一時休刊までは「ジープ社」に戻るが、「編集人」がめまぐるしい。50年6月から「中西清」、8月から「本田二郎」、51年には「高橋輝夫」「由良猛」「横山敏和」らが登場する。「発行人」も、二木秀雄から「佐藤浩四郎」「中西清」と代わる。どうやら二木秀雄が朝鮮戦争開始と共に日本ブラッドバンク創設、それに診療所院長も加わり、出版事業の手抜きが始まったようである。この間、「政界ジープ記者を名乗り金銭を要求する〇〇がいるが当社とは一切関係ありません」の類の社告が頻出している。

51年8月から52年3月まで「やむをえない経済的事情」で『政界ジープ』は休刊するが、52年4月の復刊は「株式会社ジープ新社、編集人宮下隆寿、発行人仁藤直哉」名である。どうやら大量の単行本の返品によってか、一度倒産したらしい。ちょうど地下に潜った日本共産党が、「トラック部隊」とよばれる中小企業の設立・倒産を利用した商品横流し・党資金流用に関わったといわれる時期である。以下は国会図書館でも欠号が多く、はっきりしないが、二木秀雄が参院選石川地方区に「東京の出版社社長」として立候補した『政界ジープ』53年3月・4月号は社名が「株式会社・精魂社」となっている。つまり55年の731部隊同窓会「精魂会」と似た名になるが、発行人は「市川文三」である。それが53年8月号では、二木が選挙で落選・復帰し「政界ジープ社」刊となり、「編集人小山耕二路、発行人　二木秀雄」と変わる。以後確認できるのは、1955年11月の「政界ジープ社」から翌12月の「政界ジープ通信社」への社名変更で、55年から56年3月に大企業恐喝による「政界ジープ事件」で廃刊に追い込まれる当時は「編集人久保俊広、発行人清水隆英」だった。そのため「政界ジープ事件」の7000万円近い恐喝容疑では、社長の清水隆英と編集局長の陸軍中野学校出身・久保俊広がまず逮捕され、実質的オーナーで主犯と認定された二木秀雄の逮捕は、56年4月と2週間遅れた。その間に証拠隠滅をはかった。

つまり、二木は「ジープ社」「東京トリビューン社」「ジープ新社」「精魂社」「政界ジープ社」「政界ジープ通信社」と、同じ番地の事務所にいくつもの社名を使い分けて『政界ジープ』を十年間、約百号出したことになる。これは、税金対策であろうか、リスクの分散だろうか。ただし、55年8月の731部隊隊友会「精魂会」発足と慰霊碑「精魂塔（懇心平等万霊供養塔）」建立にあたっては、大卒初任給1万円の時代に、二木秀雄は146万1100円を1人で拠出し寄付している（他の有志寄付総額5万5900円）。破産どころか、恐喝太りしたようだ。こうした二木秀雄の出版ビジネスと資金・

---

[11] この頃の二木秀雄について、山崎倫太郎「続『怪軍人伝』」（『読売評論』1950年10月号）に、陸軍中野学校・昭和通商の創設者である岩畔豪雄陸軍少将の戦後謀略として、「二木[秀雄]博士と親交があり、その二木事務所には益谷[秀次]自由党総務会長も出入りする1人だというが、二木を中心に岩畔と益谷とが交友関係にあるという推理も成り立つ」（63頁）とあるが、後続報道がなく、また後述するように益谷秀次は二木秀雄の53年参院選出馬に反対するので、朝鮮戦争時に二木が何らかの謀略活動に関わった可能性が強い、とだけ指摘しておく。

資産の謎は、おそらく 731 部隊全体の戦後の隠匿資金・財産、米軍Ｇ２・ＰＨＷの機密費等と関わると思われる。だがそれは、敗戦時の軍隠匿資金・財産、ＧＨＱ押収財産を原資にしたといわれる、いわゆる「M資金」の謎と同様に、未解明である。問題の所在を示すにとどめ、若い読者の探求に期待したい。

## 13 朝鮮戦争へのゲリラ戦・細菌戦による介入――「地球の上に蚤が降る」

『政界ジープ』の誌面からは、宮本光一・内藤良一と組んだ日本ブラッドバンク設立や、ＧＨＱ・ＰＨＷとの折衝はわからない。731 部隊については、ハバロフスク裁判『真相』報道への防戦で、ソ連のでっち上げ陰謀とする反ソ反共攻撃と日本共産党の分裂に問題をそらしての隠蔽継続作戦だった。

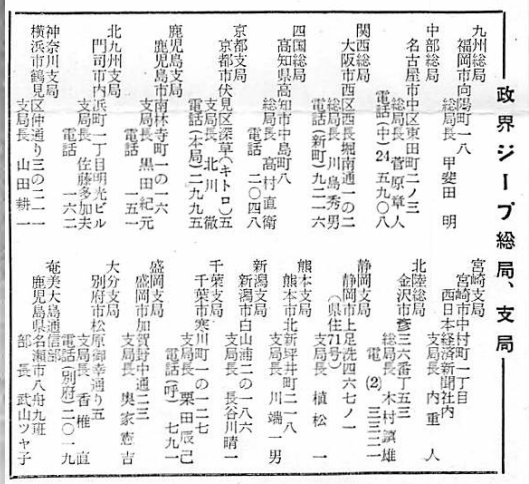
しかし**朝鮮戦争の開始は、二木秀雄の『政界ジープ』に、時局雑誌としての新たな報道領域を提供した。50 年 4 月『別冊政界ジープ』「戦争か平和か、米ソ戦を解剖する」、50 年 9 月『政界ジープ臨時増刊』「戦争、日本はどうなる」などで、「原子戦争」の可能性と共に、実際の朝鮮半島での戦況と日本共産党の地下潜行に注目して「ゲリラ戦」「細菌戦」を論じるようになる。**

恐るべき細菌戦

地球の上に蚤が降る

―細菌戦物語―

山本容


政界ジープ総局、支局

九州総局 福岡市向町一八 総局長 甲斐田 明
中部総局 名古屋市中区東田町二ノ三 総局長 菅原草人 電話(中)24五九〇八
関西総局 大阪市西区西長堀南通一の二 総局長 川島秀男 電話(新町)九二二六
四国総局 高知県高知市中島町八 総局長 高村直衛 電話 二〇四八
京都支局 京都市伏見区深草(キトロ)五 支局長 北川徹 電話(本局)二九九五
鹿児島支局 鹿児島市南林寺町一の一六 支局長 黒田紀元 電話 一五一
北九州支局 門司市内浜町一丁目光ビル 支局長 佐藤多加夫 電話 一六二
神奈川支局 横浜市鶴見区仲通り三の二一一 支局長 山田耕一
宮崎支局 宮崎市中村町一丁目 西日本経済新聞社内 支局長 内重 人
北陸総局 金沢市壱三六番丁五三 総局長 木村譲雄 電(2)三三三一
静岡支局 静岡市上足洗四六七ノ一 (県住71号) 支局長 槙松 一
熊本支局 熊本市北新坪井町二一八 支局長 川端一男
新潟支局 新潟市白山浦二の一八六 支局長 長谷川晴一
千葉支局 千葉市寒川町一の一二七 支局長 栗田辰己 電話(呼)七九一
盛岡支局 盛岡市加賀野中通二三 支局長 奥家恵吉
大分支局 別府市松原御幸通り五 支局長 香椎直 電話(別府)二〇一九
奄美大島通信部 鹿児島県名瀬市八舟九班 部長 武山ツヤ子

50 年 10 月号の特集「ゲリラへの招待状、日本でゲリラ戦はおこるか」が典型的で、「**ゲリラ活動の危険性は、日本共産党の現状からも容易に想像される。彼等の手段は列車妨害、通信施設、発電所の破壊などいくらでもある**」から、これに対抗して「我らは祖国を護る」勢力にとっても、「ゲリラは原子力時代にも最も有効な戦法である」と主張する。**二木秀雄は、朝鮮戦争の一進一退、日本共産党の中核自衛隊・山村工作隊など後方攪乱策動を見て、かつて満州 731 部隊のインテリジェンス活動で身につけた諜報・防諜活動と農村壊滅作戦の有効性を想い出したようだ。『政界ジープ』は 51 年 8 月から 52 年 3 月まで「経済的事情」で休刊するが、その復刊第 1 号に当たる 52 年 4 月号で、二木秀雄は、ゲリラ戦としての「細菌戦」を公然と提唱するにいたる。**

それはちょうど、朝鮮戦争での米軍・国連軍の生物兵器使用が、国際社会で問題になった直後だった。この局面で、二木秀雄の『政界ジープ』は、**細菌戦を容認・奨励する山本容「地球の上に蚤が降る――細菌戦物語」という 3 頁の論文を載せる。「山本容」はペンネームであろうが、その内容からして、二木秀雄ないし 731 部隊関係者でなければ書けないものである。**「恐るべき細菌戦　もしも、ペスト菌を培養された 25 億匹の蚤が、地球の上に降り撒かれたら…人類は一挙に壊滅する。そんなバカな話が…と思う人は本文を読まれよ」と自信満々のはしがきである。冒頭①「蚤も兵器」で、**1 トンの蚤とは 25 億匹で人類壊滅も可能**で「膨大な経費と雄大な構想が進歩した科学研究に裏付けられるとき、われわれの予想を絶した戦術的・戦略的な細菌戦が展開される」という。②「細菌は爆弾」では、使える細菌としてペスト、炭疽、鼻疽、発疹チフス、コレラ、チフス、赤痢、等々と挙げ、それらを実際に使う効果と共に、脅迫に用いる欺瞞的方法もある、**「国際法の戦争法規には毒瓦斯とならんで細菌の使用は禁止されているのですが、原子爆弾すら公然と正義の名の下に使用せられ無辜の民衆を殺傷するのが戦争の実体ですから、自分だけ馬鹿正直に国際法をたよりにして、無対策でいるのは自殺行為**」という。731 部隊医師としての開き直りである。③「原子戦と細菌戦」では、**原爆使用は敵味方のバランスが崩れると共倒れの恐れがあれが、「目には見えない」細菌戦は発覚するのが遅れ、1 人のペストでも発生すれば防疫のため地域の機能を停止できる、とその効果を説く。**④「細菌戦の方法」では「培養された細菌を水溶液にするもの」のほかに「細菌培養を冷凍し真空乾燥した粉末にする」方法があり、後者なら大量生産可能として輸送手段に触れ、⑤「細菌戦の防御」で米国科学戦

争指導本部の例をあげ、日本政府にも「原子戦や細菌戦等、科学的進展に応ずる今後の戦争の様相を大局的に把握しなければならない」と細菌研究の必要を説く。**この論文は、朝鮮戦争当時の反共時局雑誌に目立たぬかたちで掲載されたものであるが、731 部隊関係者が、自分たちの研究の合理性・先見性を説いて開き直ったものとして、731 部隊の復権におけるモニュメント的意味を持つ。**

**「精魂社」社長・二木秀雄は、おそらくこうした論理を用いて、全国に散った旧隊員たちを説得し、55 年隊友会「精魂会」結成、慰霊塔「精魂塔」建立に導いたものと思われる。**

14　金沢内灘射撃場闘争への大義なき介入、参院選出馬惨敗、「戦後最大の恐喝事件」被告に

『別冊政界ジープ』1951 年 1 月号の特集「法と好色文学」は、言論の自由と性描写の問題を扱って、売れたようである。今日でもこの号だけは法学部図書館等に持っている大学がある。**キワモノと学問の境界で売上げを伸ばす、二木一流の編集**である。『政界ジープ』53 年 3 月陽春特別号には、**精魂社社長となった二木秀雄の政界進出**について、編集局長・市川文三執筆と思われる「デスクより」という提灯持ち記事が出ている。すでに 52 年 12 月 25 日から、北陸放送（ＪOMR）で政界ジープ提供・二木秀雄構成の「新しい話題の時間」をラジオ放送しているという。

本社社長二木秀雄が一度参議院選挙に出馬するという噂が伝わるや、その道に異常なセンセーションを起して遂に一代の風雲児・怪物出るかと肝を冷やす者、狂気して今日あるを期待し早くも激励賛同の手紙を寄こす者やら、この所社は異常な活気に包まれている。

翌 4 月号でも「北陸 3 県の政局展望」で「自由党がままならぬ石川県」の「井村・林屋の対立」を取り上げ、「茫漠たる風貌の人　本社社長　二木秀雄」の写真を大きく掲げているが、この『政界ジープ』が石川県でどれだけの読者を持っていたのか、選挙用にばらまいたのか、当時の地元新聞選挙報道でも、その後の選挙分析や内灘闘争史でも、ほとんど触れられていない。**内灘米軍射撃場誘致が最大の争点の選挙で、731 部隊の軍歴を選挙に使うことも出来ず、戦後のGHQとの関係から辻政信ほどには「反米自衛」を強く訴えることはできない中途半端な二木秀雄は、金沢一中・四高・金沢医大の同窓生の一部に頼った泡沫候補に終わった。**『政界ジープ』53 年 5 月以降は欠号が多く確言できないが、敗戦の総括も見当たらず、大きな挫折であったろう。

時局雑誌『政界ジープ』の検討も、最終局面に入った。**1952 年 3 月の復刊から 56 年 3 月、政界ジープ恐喝事件による経営陣総検挙、廃刊までの時期である。ただしこれは、2 つの意味で簡単に済まさざるをえない。その第 1 は、この時期の『政界ジープ』は、国立国会図書館でも大宅壮一文庫でも極端に欠号が多く、系統的な内容分析が難しいことである。発行元もジープ新社→精魂社→政界ジープ社→政界ジープ通信社、とめまぐるしく変遷する。二木秀雄が「編集後記」等に登場するのは以前と変わらないが、編集人は少なくとも宮下隆寿、市川文三、久保俊広、発行人は仁藤直哉、市川文三、清水隆英と変わる。おまけに、元記者の取材を名目にした詐欺・恐喝まがいが多いらしく、「〇〇記者は本社と関係ありません」という社告が、以前にもまして目立つようになる。もう一つは、『政界ジープ』の看板に反して、52 年以降は、経済記事が多くなる。保守合同・左右社会党統一へのマンネリ化した報道が続く。どうやら発行部数も減誌らしい。いったん 51 年 8 月にジープ社が倒産したとき、『財界ジープ』『経済ジープ』『医学のとびら』『別冊政界ジープ』『ジープ』等々の多角経営ができなくなり、復刊後は『政界ジープ』1 誌にしぼって、単行本もやめて、細々と「時局雑誌の老舗」を守っている。**

**かつてのライバル誌、左派の『真相』は、講和・独立後の 53 年 11 月（57 号）から復刊し「平和、独立、民主主義の旗じるし」「アメリカに帰ってもらう世論をつくる雑誌」と堂々と謳ったのに対して、『政界ジープ』にはそうした覇気・特色がない。52 年 4 月の復刊号で、二木秀雄が「独立」後も「我が国唯一の大衆政治誌」「政財界の裏面誌」と、昔の名前をうたう程度である。佐和慶太郎の『真相』は、日本共産党分裂による読者層維持の困難のもとでも、復刊直後から「真相鋏厄史、占領下の言論とはこんなもの」という自誌のGHQによる検閲体験の記録を 13 回連載して反響をよび、今日でも検閲研究の貴重な素材となっている。下山・三鷹・松川事件、白鳥事件、ラストボロフ事件などに突っ込んだ調査記事を書き、水爆やABC兵器報道でも『政界ジープ』より具体的で新鮮だった。**原水爆禁止運動、米軍基地反対闘争等社会運動の時局報道の他、「濃縮ウラン受入れの裏にあるものは――原子力の平和利用という名の陰謀」（55 年 5 月）では、後にＣＩＡが背後にいたことが明らかになる**正力松太郎と中曽根康弘の原発開始期の暗躍を報道**するなど、先駆的役割を果たした。もはや「ライバル誌」とはいえない差だった。

それに対して『政界ジープ』は、二木秀雄「鮎川義介氏の闘志」（52年6月）、「街の庶民金融」（52年12月）、二木「商工金融の行き方」（53年3月）、「特殊金融機関の裏表」（53年11月）、「東京銀行の謀略」（54年2月）、「粛正すべき日本専売公社」「2億数千万円喰った日興證券の遠山天皇」（54年7月）、「隠された電電公社のカラクリ」「第2の保全経済会、詐欺師太陽生命」（55年1月）、「千葉相互銀行乗っ取り事件」（55年8月）、「四

国電力の実態を衝く」（55年12月）、等々、特定の企業ないし企業経営者を実名で挙げて、その金融・金銭スキャンダルを暴く記事が目立つ。特に地方の相互銀行や中小企業金融が狙われた。この復刊後の末期『政界ジープ』の行き着いた先が、1956年3月に発覚する「戦後最大の恐喝事件」＝政界ジープ事件であった。

巻末で目立つのは、政界ジープ総局・支局の一覧表である。九州・中部・関西・四国に総局をおき、全国13の支局を持っている。これは、50年頃の最盛期ジープ社の東京本社集中管理方式とずいぶん異なる。確かに地方の銀行・企業・議会についての記事もあるが、月に1冊の時局雑誌編集にしては大げさな布陣である。結論的にいえば、これらの総局・支局を使って全国的に展開されたのが、企業スキャンダルをネタとした脅迫と恐喝の金集めであったのではないか[12]。当時の編集長は久保俊広、陸軍中野学校出身だった。

1956年3月13日『朝日新聞』紙上で「政界ジープ事件」発覚が大きく報道されるにあたっては、「『政界ジープ』に手入れ、政・財界・知名人脅す、社長ら7人を逮捕、大阪支社も捜索」と地方支局も一斉に手入れされている。「某大会社に重役陣のスキャンダルがある」といい「この事実を書くぞ」と脅して十数万円をとった、など被害に遭った一流会社・銀行は30数社、「暴露記事を武器にした悪質なおどし事件」とされる。典型的な恐喝である。繰り返しの社名変更、編集者・発行者刷新、支社の分散化は、この日を予期しての犯罪隠し・リスク分散であったろう。久保俊広は「政界ジープ通信社」社長として3月13日に真っ先に逮捕され、3月28日に「政界ジープ社」社長清水隆英の逮捕、4月2日に、本丸である「元株式会社政界ジープ社社長・医博」二木秀雄の逮捕にいたる（朝日新聞4月2日）。

一時は被害総額6960万円の「戦後最大の恐喝事件」とされたが、最終的には野村證券・山一証券・住友銀行・神戸銀行など19社6435万2千円の恐喝事件として立件・起訴された。神戸銀行は、日本ブラッドバンクの大株主でメインバンクである。内藤良一も二木との関係を切ったであろう。二木は、64年東京地裁で懲役6年が求刑され判決4年、高裁・最高裁まで行って69年に懲役3年で結審・服役する。

## 15 二木秀雄『政界ジープ』の裏社会への遺産──総会屋系時局誌・業界誌への系譜

有罪の被告は、二木秀雄のほか、久保俊広、清水隆英、成重正則、五島徳二郎の5人だった。この政界ジープ事件での逮捕を機に、二木秀雄は表社会からしばらく身を引き、2つの裏社会でのインテリジェンス活動にたずさわる。一つは731部隊隊友会「精魂会」の組織化、もうひとつは恐喝事件の延長上での政財界の裏資金・ヤミ金融ブローカー、総会屋活動であるが、ここでは後者の表に出た場面だけを見ておこう。

『政界ジープ』末期の編集長・久保俊広は、1987年に『今も生きているテキヤの仁義』という本を出している。その奥付に、顔写真入りで略歴を入れている。「大正13年7月18日、鹿児島県に生まれる。拓殖大学卒、前橋陸軍［予備］士官学校卒、陸軍中野学校入校。戦後、雑誌『政界ジープ』社常務取締役兼編集局長、『国会ニュース』の社長を経て、総合出版『ジャパンポスト』取締役社長兼編集主幹、『産経リサーチ』取締役社長として現在に至る」と堂々と書いている。テーマがテキヤで、発行元は自分が社長のジャパンポスト出版部だから、むしろ読者への「勲章」と考えたのだろう。

もう一人の被告五島徳二郎は、満州時代に岸信介のブレーントラスト、竹馬の友であった。岸が満鉄役員時代の、満州国治安部高官だという。戦時中は陸軍御用達の秘密武器商社・昭和通商で、阿片売買で活躍したらしい。昭和通商には、陸軍中野学校関係者が多かった。満州での731部隊・二木秀雄とのつながりはわからないが、久保俊広とは中野学校・昭和通商がらみでつながり、『政界ジープ』に誘われたのだろう。昭和通商に在籍した山本常雄によると、昭和通商情報部には、4つの系統の諜報機関があった。日本ブラッドバンクの株主となった調査部長・佐島敬愛が、人類学者岡正雄・今西錦司など「文化人、ジャーナリストおよび自由主義を標榜する人士を好み、直情野性的なものを蔑視する傾向が強かった」のに対し、五島機関の「五嶋徳二郎氏が満州国謀略の本陣たる治安部より推挙されて入社しただけに調査部における特殊活動はほとんどこのグループが引き受けていた。…グループ自体として岩畔［豪雄］、藤原［岩市］両機関と密接な関係、中野学校出身者の現地再錬成を引き受ける等、大なるエネルギーをもって活動したが、戦争終盤に至り、東条政権打倒事件に連座、憲兵隊の強烈な弾圧も加わり、その活動力は急速に衰微した」というが、二木秀雄の『政界ジープ』は、こうした人材が取材記者の名目で潜り込む格好の場であったのだろう[13]。「宝石商」も闇金融ブローカーにふさわしい。

こうした経歴からも、久保俊広と五島徳二郎が、三浦義一を後ろ盾にして豊田一夫が52年に作った愛国右翼団体「殉国青年隊」に関わったのは事実だろう。三浦義一は、占領期にＧＨＱ・Ｇ２ウィロビーと深い関係だった。60

---

[12] この55年総局・支局の代表者リストと、隊友会精魂会発足時に二木秀雄の組織した56年元731部隊隊員名簿を照合してみたが、いまのところ合致者は出ていない。

[13] 山本常雄『阿片と戦争──陸軍昭和通商の７年』ＰＭＣ出版、1985年、44─45頁。

年安保を機にした岸内閣を支える右翼民族派・ヤクザ暴力団の全国糾合にあたって、豊田は児玉誉士夫と対立したともいわれるが、関西電力の芦原義重にくい入り、原発利権と政治家の橋渡しとなった。

清水隆英は66年には「無職」であるが、公判中の59年1月には「政財界ジープ社・編集発行人清水隆英」で『政界ジープ』を再刊したらしい。「御成婚ちかづく皇太子と正田美智子さん」「政界実力者群像」「財界実力者群像」のほか社説「岸内閣退陣せよ」を掲げたが、すぐにつぶれたようだ。「接骨院経営」という成重正則の手がかりはない。

こうした末期『政界ジープ』関係者のその後を追いかけると、「政界ジープ恐喝事件」の残した遺産がみえてくる。ひとつはいわゆる総会屋、正確には出版社系総会屋の有力なルーツが、二木の右派時局雑誌『政界ジープ』にあったことである。

今日では度重なる商法改正で総会屋による株主総会あらしは目立たなくなったが、この方面の必読書といわれる『ドキュメント総会屋』の著者・小野田修二自身が『政界ジープ』記者を経て『月刊ペン』編集長からフリージャーナリストである[14]。ライバル誌だった佐和慶太郎の『真相』が57年廃刊後、その手法が79年に岡留安則の『噂の真相』創刊に受け継がれるのはよく知られているが、『政界ジープ』も、いわゆる総会屋系雑誌といわれる『現代の眼』(木島力也)『創』(小早川茂)『流動』(倉林公夫)『新雑誌X』(丸山実)などに残党が入り込む、ないし編集手法等が受け継がれた可能性がある。1984年に廃刊になる『日本読書新聞』の末期に暗躍したのは、版元日本出版協会を乗っ取り理事長をつとめた「国会に巣食うダニ」久保俊広だった。

伊藤博敏の『黒幕』は、『現代産業情報』社主で大きな経済事件の裏に必ず出て来る「兜町の黒幕」石原俊介の師は、小野田修二だったという。また保守系論壇誌『自由』の石原萠記と東京電力を結びつけたのは、情報誌『マスコミ時代』の発行人だった大橋一隆だったという。大橋は『政界ジープ』記者時代に東電首脳に食い込み、東電のマスコミ対策を事実上差配した。2011年3月11日福島原発事故のさい、東電勝俣恒久会長は大手マスコミ幹部と中国旅行中で問題になったが、この「愛華訪中団」の仕掛け人が、大橋とその遺志をついだ石原萠記だった[15]。

さらに興味深いのは、1986年東京地検特捜部が摘発した平和相互銀行の特別背任事件の裏事情である。伊藤は、『政界ジープ』編集長をつとめた本田二郎が、「退社後、[平和相銀会長・小宮山]英蔵の社外秘書的な存在となり、ダーティーな仕事を引き受けてきた。また、本田以外の『政界ジープ』人脈も、平和相銀に食い込んできた」という。しかも平和相銀グループ所有の鹿児島県馬毛島を自衛隊水平レーダー基地用に買い上げさせる20億円の政界工作は、「殉国青年隊」あがりの大物右翼・豊田一夫が担当した。重要なのは、本田二郎の平和相銀への接近が『政界ジープ』の「社長が小宮山英蔵と親しかったので」と、二木秀雄の名はないが、早くからの二木と小宮山一族の関係を示唆していることである。すると平和相銀事件への本田のほか、久保俊広や五島徳二郎、豊田一夫らの関与も、二木の流れである。

平和相銀の小宮山英蔵は、実弟・小宮山重四郎が自民党の衆議院議員(郵政大臣)であった。保守系政治家や総会屋・右翼などとも関係を持ち「闇の紳士の貯金箱」とまで噂されたが、1979年に没し、後継者争いの内紛がおこった。そこに、闇の世界の黒幕達が暗躍する。國重惇史『住友銀行秘史』の描く裏世界である(講談社、2016年)。ちょうどその時期、刑期を終えた二木秀雄が、新宿歌舞伎町であらたに始めたロイヤル・クリニックと日本イスラム教団の派手な産油国工作が、週刊誌でも話題になった。その日本イスラム教団の広告塔としてあげられたのが、俳優水ノ江滝子、劇作家阿木翁助と共に、「前郵政相の小宮山重四郎氏も昨年入信」だった[16]。

小宮山兄弟と二木秀雄の関係は、占領期から80年代まで続いていたと考えられる。二木の裏社会での暗躍の有力なパトロンは、平和相銀・小宮山英蔵であった。

---

[14] 小野田修二『ドキュメント総会屋』『広告王国』大陸書房、1981・82年。

[15] 伊藤博敏『黒幕――巨大企業とマスコミがすがった「裏社会の案内人」』小学館、2014年、42―43頁、66―70頁。山田穂積『謀略の金屏風――平和相互銀行事件・その戦慄の構図』宝島社、1994年、20頁以下、参照。

[16] 同右、80―82頁。『週刊文春』1979年3月22日、『週刊新潮』1979年5月17日、参照。